魔法少女リリカルなのは ～Dual Striker～

ユゥ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　～Ｄｕａｌ　Ｓｔｒｉｋｅｒ～

【Ｎコード】
Ｎ９９９３Ｒ

【作者名】
ユゥ

【あらすじ】
一つの体に二つの人格を持つ青年。ある日、その青年は機動六課へと向かうようにと頼まれる。青年は何を思い、何を望むにか？
そして、彼は何を得るのか？

描写などが上手く書けていないとこも、あります。なのでアドバイスお願いします（＾＾）

Prologue

管理局内。そこのある部屋に二人の男が立っていた。一人は涼しげな表情。それに対しもう一人は眠たそうに目を擦っていた。

「も～止めてくださいよ……俺昨日まで長期任務についていたんですよ？少しは寝させてくださいよ～ゲンヤさん」

「いや、おまえに頼みたいことがあってね」

「あ～、でしょうね」

でなきゃ俺を呼び出したりしませんもんね。男の呟きを聞きながら、いつもと同じ局員の制服を着ているゲンヤは小さいモニターを出し、手際良く操作する。

「機動六課……？最近できたっていう遺失物管理部の……それがどうしたんだ？」

モニターに表示された字を見つめながら青年は言う。次に、画面には管理局でかなり名の通った人達が表示される。

「そう……八神はやてという人が部隊長をやっている。しかし、彼女はまだ若い……それに頼れる人が欲しい」

「それで俺に出向けとでも？」

青年は再び目の前にいるゲンヤに向き直り軽い口調で聞いてみた。

「その通りだ。察しが良くて助かるな。それにおまえは『ライセンス』持ちだろう？」

「自由だからか……いや、でも待て！！俺の休暇はどうなる！？本局からはしばらく休んでもいいって言われたんだぞ！！」

今休まないとしばらく休めない気がする……休める内に休まなければ！！

そして、彼の心中での戦慄と悲願は、届いたのだろうか。

「そこは問題ないさ。機動六課で休めばいいだろう？少なくとも今よりは楽だろうからな。それに頼めるヤツはおまえくらいしかいないんだ……だから頼む」

ゲンヤは真剣な目付きで青年を見る。

「……そこまで言われちゃったら断れないよ。わかった、いつから行けばいいんだ？」

青年は妥協したらしく、素直に従うことにした。　楽や休みと言った言葉に弱いのだろうか。

「じゃ、明日から頼むよ。向こうには明日に向かわせるって言ってあるからな」

「……は？いつからだって？」

今のは聞き間違えだと信じたい青年。

しかし、彼の心中での戦慄と悲願は、

「いや、だから明日から」
届かなかった。

「……うそだ…ろ…」

唖然とする青年。
そして対照に、ニコヤかに笑うゲンヤ。

「……ふ……不幸だぁぁぁぁぁぁ！！」

とある管理局員によると、その日、部隊長室からは物凄い大きな絶叫が聞こえたという……。

設定（前書き）

とりあえず、主人公の設定です。

設定

名前：アーク・ハルバート

年齢：１９歳

出身：ミッドチルダ

デバイス：アイリス

魔力光：黄色（というより若干オレンジに近い）

魔法術式：近代ベルカ式

魔力資質：ＳＳ

魔導師ランク：暫定Ｓ（最後に受けたのがかなり前のため、現在は不明）

魔力変換資質：発電

階級：一等空佐

資格：ライセンス

ライセンス：執務官に近い感じで階級ではなく、役職に近い。基本的には特定の部隊に所属することはなく、個人で活動をする。（ｅ

x．部隊の増援など）
そして、相手がいくら階級が上でも任務中および戦闘中では行動自由権がある。（行動自由権は特務以外は基本的に施行される）
任務としては、本局からの特務が主体となる。そのためか、階級が上がるのが異常に速い。
試験は執務官になるよりも難しく、個人で全距離をこなし、長時間戦闘もできないと合格できない。
ライセンスは最近認められたものであるため、知名度が低く、ライセンスを持っているのは現在では少人数で極僅かにしかいない。

容姿は黒髪で少しボサり気味の髪型をしていて、目の色は紺色。身長はとくに高い訳でもないが、型胃はいい。
基本的には誰にも優しいが、仲間を傷つけた相手には容赦ない。けっこう抜けているところがある。
戦闘中、飛ぶことが多いのに何故かヘリコプターが大嫌い。そのため視界に入った途端、拒絶反応が起こる。
ゲンヤに保護されてから長いので仲が良い。しかも本人は頼まれると断れない性なので、しぶしぶゲンヤの願いを聞いたりもする。
フェイトとも知り合いである。過去、執務官の仕事をしていたフェイトと、任務を一緒にすることになってからは、よく会っていたりもした。
バリアジャケットは、全体的に黒でマントに長ズボンと半袖である。
私服も好んで黒系統を着る。

戦闘能力は異常と言っても過言ではないくらい高い。アーク自身、万能だが接近戦の方が得意とする。
管理局内ではトップクラスの強さ。一部では『黒き迅雷』と呼ばれ

ている。
そして、何よりアーク自身の中には第二人格である『ルーク』がいる。ルークは基本凶暴的で、闘いなどといったものを好んでする方向がある。しかし何を目的として、そのような行動をしているかは、アークは知らない。

デバイス設定

名前：アイリス

アークが使うアームドデバイス。アイリスには、ＡＩを搭載されていない。アークの立場上、戦闘をするにあたって万能に作られているため、複数の形態が存在する。

［ｍｏｄｅ　ｓａｖｅｒ］
この形態は鍔と柄しかなく、刃の部分は１．２メートル程の長さの黄色い魔力刃て形成される。刃の長さと太さは変えることができ、それにより攻撃範囲及び威力を変化する。双剣にすることも可能。

［ｍｏｄｅ　ｂｌｕｓｔｅｒ］
左右一つずつ、合計二つの双銃。ピストル状の容姿になっており、威力は他の形態程ではないが連射性が非常に高く中距離での戦闘で用いる。

［ｍｏｄｅ　ｂｉｔ］
合計八個のビットの形態をしている。この形態は砲撃や広域魔法を得意とする。ビットは、先端に向かって細長い六角形の形をしてい

て、長さは５０センチ。レーザー状に魔力を放出し貫通能力が非常に高い。
それ以外にも、ビットを自在に分散、密集させることにより多方向からの攻撃に対応できるほか、味方の防御にも使用できる。ビット自体からシールドを発生させることができる。

［？？？？］
この形態は現在では、効率よく使用することが出来ないため基本的には使っていない。
この形態は、１メートル程の二本の実剣でその刀身には魔力が纏われている。そして、両肩の付近に１メートルの細長い六角形のシールドがある。それで横からの攻撃を防ぐ事が可能。そのシールドは、各四個に分離することができ、計八個のビット形態となることができる。その状態だと複数の役割を持つこととなる。一つ目は魔力をレーザー状に放出すること。二つ目はビットから魔力刃が形成されソードビットとして使うこと。三つ目は、分散、密集させることにより防御できること。

第一話　機動六課（前書き）

投稿出来ました。

感想待ってます

第一話　機動六課

「さてと……やっと着いたか……」

そう呟く青年は海風に吹かれながら目の前の建物を見上げる。

「……結局、昨日のあれから準備やらなんやらで殆ど寝れなかったし……ゲンヤさん、今度会った時覚えてろよ……」

他人から見たら独り言をしている変な人なのだろうが、今は誰も回りにはいなかった。

彼がもう少しユーモアな男だったのなら、「誰もいないなんて、機動六課なのに機動してないじゃん」などと身も凍る冗句の一つもかましたのだろうか。

ともあれ青年は一人、ゆっくりと機動六課へと足を進めて行った。

コンコンと音をたてながら部屋のドアを叩く。

「は～い、開いてますよ」

「お邪魔します」

なまり、と言ったか。少し妙なイントネーションの入った声に、

青年は静かにドアを開け、部屋に入る。そこには、一人の茶色の髪の毛をした少女とも呼べそうな年頃の人がいた。

「ん？見ない顔やね」

頭上にハテナが浮かぶその人の反応を見て、青年は一瞬だけ嫌そうな顔をする。

（ゲンヤさん、俺の写真とか送って無いのかよ…）

だが今は自己紹介が先だと、青年はこれはまた粗末な挨拶をする。

「今日から配属予定の一等空佐、アーク・ハルバートだ。よろしく」

「ああ、君がナカジマ三等陸佐からの。初めまして。機動六課の部隊長の八神はやてです」

二人はお互いに挨拶すると、突然後ろのドアが開いた。

「はやて、入るよ？」

そう言って入って来たのは金髪の女性と栗色の長い髪の女性だった。入るよと言っておきながらもう入って来てる！とアークが思ったのは、言わずもがな。

「あ、あれ？……フェイト、か？」

入って来た二人の中には、アークにとって見慣れた顔があった。

「ア、アークッ！？」

フェイトの顔に一瞬驚愕の表情が浮かぶが、すぐにそれはいかにも怒っているというものに変わる。
フェイトがヒールをカツカツと鳴らしながらアークに近づいて行くと、右手を上げてその頬をはたいた。部屋に響く良い音が鳴る。

「痛ッ！！」

別に痛くはないのだが、アークは反射的に口に出してしまう。何が起こったか分からないと言った風に、自分の頬を抑えてキョトンとしている。

「アークなんて……最低よ！！」

そう怒鳴って、フェイトは部屋を出ていってしまった。

「……」

他の二人は珍しい物を見たかの様な顔で出て行くフェイトを見送り、次に不思議そうな顔をしてアークをを見る。
部屋は、非常に気まずい雰囲気となった。

「あ、えっと……その……なんや、仕切り直しちゅうわけやけど、自己紹介頼むわ」

はやてが誰の為なのか、渡し舟をだす。これがなかったら、このまま流れ解散というような事態になりかねなかった。
アークは一度咳払いをすると、まだ挨拶をしていなかった女性の方へと向き直る。

「今日から六課に配属されたアーク・ハルバート一等空佐だ、よろしく！！」

「あ、初めまして。機動六課でスターズ分隊の隊長をしている高町なのはです」

自然体で言っている上に、この様な場ではちゃんとした挨拶をしたのだが、

（何か、堅苦しい感じだな）

一人そう思うアークがいた。お前が軽すぎるんだなどと言う野暮なツッコミは不要だ。

「俺、そんな堅苦しいのは好きじゃないんだよ。どうせ同じくらいの歳なんだからさ、楽にしようぜ？俺の事もアークって呼んでくれよ」

彼の言葉に、二人は一度顔を見合わせる。すると、さっきまであった緊張感が部屋からなくなった。

「そうやね。アーク君の言うとおり、せっかく同い年なんやし」

「あ、そうだ。フォワードのみんなにも紹介しなきゃだから訓練所に行かない？」

お互いの挨拶がすんだところでなのはがひとつ提案をしてきた。

「そうだな……挨拶は早めに済ませて置いたほうがいいからな。そうしよう」

はやてに一礼をし、なのはに連れられてアークは訓練所に向かっていく。

「そういえばさ……言いたくなければいいんだけど……フェイトちゃんと何かあったのかな？」

さりげなくなのはがアークに聞いたそれは、彼にとって至極答えづらい質問だった。しかし軽く行こうと言った矢先、答えられないと言うのもなんだ。

「えっと、まぁ……俺が約束をすっぽかしたんだ……言い訳じゃないけどさ、その日から長期任務が入っちゃって……それで……こんな感じ……」

「にゃはははは、だからか……。連絡とか埋め合わせはしなかったの？」

ギクッ！！と、アークに身体が見て分かる程大きく跳ねる。しかし気付いてか否か、なのははその事に何も言わない。

「……連絡は、できなかったんだ。なんせ、いきなりだったからな……でも、埋め合わせはするつもり……」

さすがアークも、フェイトには悪いことをしたと思っていた。いくら任務だからといって、約束を破ったのは俺だ。だから、今度埋め合わせしないとなーと。そう思うアークであった。

「へぇ～、ここが訓練所か～。かなり広いな」

「そりゃそうだよ、六課には最新設備が色々とあるからね」

隣ではなのはが説明してくれる。

辺りを見回すと、少し離れたところに四人の男女がストレッチをしているのが見つかった。

近づこうとしたが突然、後ろから声を掛けられた。

「アークではないか？何でこんなところにいる？」

聞いたことがある声だった。そして、今日だけは絶対聞きたくなかった。

「や、やぁシグナム。今日から六課に配属されることになったんだ」

何故聞きたくなかったかって？

そんなのは簡単だ。会うたびに絶対……

「そうか。なら今から模擬戦でもしないか？」

そう、会うたびに模擬戦をしないかと言われる。

言われるというより半場強制だが……

「何故そうなる！？今までの会話で、なんでそっちに持っていくんだよ！！」

「そりゃ、腕が鈍らないためだろう？」

とか言いつつも既にバリアジャケットを展開していた。

「い、いや～実は今日寝不足で～」

決してこれは逃げるわけではない、本当に眠いんだ！！

「アークとシグナムが模擬戦するの？」

なのはが要らぬ誤解をする。

ヤバいこの空気だと絶対模擬戦をすることになる！！

どうにかしなければ！

「見てみたいかも。ついでにフォワードのみんなにも言ってこよ」

ほらそこ！！話を大きくしないで！！

向こう側では、既になのはがフォワードの四人を集め始めている。

「だから……シグナム、聞いてる？」

「よし、では始めるか。勝利条件いつも通り。相手をを降参させるか、一発決めるかだ」

絶対聞いてない！！もはや無視の領域！！

シグナムはレヴァンティンを振り上げ既に戦闘体制だった。

「話聞いてくれてないのかよ。しょうがないアイリス、セットアップ！！」

やけくそぎみに叫ぶと体が光に包まれる。

光が消え、黒いマントに黒い半袖と長ズボンのバリアジャケットを

着ると、改めてシグナムと対峙する。

第二話　VSシグナム（前書き）

何とか書けました（汗）

第二話　ＶＳシグナム

アークに向かってレヴァンティンを振り下ろしてくるシグナム。
この程度の攻撃であれば、場数を踏んできたアークなら反応することなど造作もないことだった。
それに対抗するためにアークは、右手に握られているアームドデバイス『アイリス』から魔力刃を形成させる。それは１．２メートル程の長さの黄色い魔力刃だった。レヴァンティンの攻撃を防ぐように『アイリス』を両手で持ち、切り上げる。
そして、互いの剣がぶつかり轟音が響く。

「まったく、いきなりやるなんて……バリアジャケットの展開がもう少し遅かったら危なかったぞ！！」

アークはひとまず、距離をとりながら上昇する。
それに続いてシグナムも上昇してくる。

「避ければ問題なかろう」
「避ければって……無理があるわ！！」

アークはシグナムに向かって急加速し、シグナムもこちらに向かって加速してくる。
そして、また互いの剣がぶつかり合う。
ぶつかりあった瞬間、アークはレヴァンティンを受け流すかのようにし軌道をわずかにそらす。

「なッ！！」

シグナムから驚きの声が上がる。
そして、アークは無理矢理シグナムの隙を作るために、何もない左手に魔力を集中させる。
すると左手の中に目映く黄色い魔力が塊となっていく。
そのままシグナムに向かって集中させた魔力を爆風とともに、アークはシグナムの方向へと解き放つ。
それをシグナムは、体を捻り間一髪でかわすが爆風は受けきれず吹き飛ばされる。

「あい変わらず無茶苦茶な戦い方をするな、アークは」

アークとシグナムはお互い距離をとり、間合いを確認する。

「そりゃ、どうも。誉め言葉として貰っとくよ」

アークとシグナムはアップが終わったように、体を動かし始めていた。

「シグナム、そろそろ本気でやろうぜ」

「ふ、そうだな。遊びもここら辺にするか」

空気がはりつめる。二人は一触即発の状態だ。
何かあればそれが引き金となり、また戦いが始まるだろう。
その引き金を引いたのは……
「アイリス、ギアを上げるぞ」
……アークだった。

「ｏｋ，ｍａｓｔｅｒ」
そして、アイリスから形成されていた魔力刃がさっきよりも少しだけ太く、そして長くなる。
「行くぞ、シグナム！！」

アークはそれと同時に、シグナムに突っ込んで行く。
距離を詰めた瞬間、アークはアイリスを振り下ろし、シグナムはレヴァンティンを振り上げてくる。
そして、さっきと同じく剣同士のぶつかり合いが再び始まる。

「凄いね、アーク君。シグナムと剣で互角に戦えるなんて」
なのはは何度も剣がぶつかり合う二人の戦いを見て呟く。
アークはシグナムの攻撃を見切り、確実に受け流したり、シグナムも同様の事をしているがなかなか決着が着かなかった。
「ここまで強ければ、ゲンヤさんが推薦するわけだ」
しかし、フォワードの四人はイマイチ状況がつかめなかった。なぜならシグナムがいきなり知らない男の人と戦っているからだ。
「なのはさん、シグナムさんて戦っている、あの人誰なんですか？」
疑問に思ったティアナは近くにいるなのはに問う。
「あの人はアーク・ハルバート一等空佐、今日から六課に配属されることになったんだよ」

「い、一等空佐!?なのはさん達と同じくらいじゃないですか!?」
確かに、アークはなのは達と同じくらいの歳だが、一等空佐というのは尋常じゃないだろう。
それならシグナムと互角に戦えるというのも頷ける。
(やっぱり、あのアークって人も世間で言う天才の部類に入る人なんだ)
この時、ティアナは劣等感を感じられずにはいられなかった。

「そろそろ終わりにしないか?ずっとやってるわけにもいかないし」
正直、早く寝たいからとかそんな理由ではないと信じたい俺である。
「そうだな、次の一撃で終わりにするか」
俺の意思が伝わったのか、ただ単に戦いを楽しみたいのかはわからないが、シグナムはレヴァンティンを構え直す。
「アイリス」
「レヴァンティン」
「「カートリッジロード!!」」
俺達二人はカートリッジをロードし、シグナムは刀身に炎を、俺は

刀身に電気を纏う。
「では行くぞ」
「ああ！！」
俺とシグナムは同時に空気を蹴り、攻撃を繰り出した。
「紫電……一閃！！」
「迅雷……一閃！！」
刃がぶつかり合い、爆発が起こる。そして視界全てが土煙に隠れた。

「どっちが勝ったの！？」
さっきまで黙っていたスバルが身を乗り出しながら確認する。
他の人、全員も注目は土煙の中に向けられていた。
「煙が……晴れてきた」
ティアナが言い終わると同時に、煙の中の影が見えてきた。

「シグナムの負けだな…」
膝をついているシグナムにアイリスを喉に当てる。

「ふ、私の負けだな……」
俺はシグナムに降参の意志があるとみてアイリスをシグナムの喉から離し、バリアジャケットをとく。そしてアイリスは待機状態に戻った。

「ふぅ、危なかった」

膝に手を置き前傾姿勢になる。すると自然にため息が出てしまった。

「それはないだろう、最初から圧倒されていたぞ？」

「それはないって、いくら俺でもそれは出来ないって！しかもリミッターも掛かってるしさ」

視界の片隅に見えた、駆け寄ってくるなのは達を見ながら、俺は少しはぐらかしたように言った。

「ところでシグナム……」
隣に居るであろうシグナムに、焦点が定まっていなさそうな目をしながら言う。

「ん？なんだアーク？」

「もう……無理だわ……」

視界が黒一色に染まり、フラッと体が揺れたと思うと、俺はそのまま重力にまかせて倒れこむ。

「…お…アー……大丈……か！？」

回りから自分の名前を呼ぶ声が聞こえたが、段々と回りの声が聞こえてこなくなり、意識が薄れていく。

「……うぅ……」

どうやらシグナムと戦った後に倒れてしまったらしい。
ダルい身体を起こして辺りを見回す。ここは、さっきまでいた訓練所ではないようだ。その証拠に俺はベットに寝てるし、医務室みたいなところにいる。

「あら、気がついたかしら？」

少し離れたところに座っていた見知らぬ女性から話しかけられた。

「……あぁ、今気付いたところだ」

「そう、そういえば自己紹介してなかったわね。ここの医務室担当のシャマルよ、貴方は……？ここじゃ見ない顔だけど」

はやて何も言ってないのかよ！！と言ってやりたいが生憎彼女はここにはいないので言えない。

「今日からここに配属されるアーク・ハルバート一等空佐だ」

今までやってきた粗末な挨拶をする。

「今日？貴方ここで昨日からここで寝てたわよ？」

「……え？……昨日？」

おかしい、確か俺は今日からここに配属されるはずだ。しかし、窓の外を見ると夕方と言うわけでもないのに俺が機動六課に着く前より日が低い。つまり、昨日の模擬戦後から寝てることになる。

「そうだ、はやてのとこに顔出しに行かないと」

さすがに、いつまでもここに居るわけにはいかないし、実はまだ部屋の場所やこれからすることなどを聞いてないのだ。

「その体で？何なら呼んできましょうか？貴方は寝てた方がいいわよ」

気遣ってくれたのかシャマルはそう言ってくれた。

だが、話に行く相手は六課の部隊長だ。ここまで来てもらうなんて、いくらなんでも失礼だと思う。

「大丈夫だ、寝るなら自分の部屋で寝るから」

俺はシャマルにそう言い残し部隊長室に向けて疲労感が残っている体を動かしていく。

コンコンと音をたてながら部隊長室のドアを叩く。
「は～い、開いてますよ」
「お邪魔します」
少し妙なイントネーションの入った声に、俺は静かにドアを開け、部屋に入る。やはりそこには、はやてがいた。
「ん？見ない顔やね」
頭上にハテナが浮かぶはやての反応を見て、俺は一瞬だけ嫌顔をする。
「嘘つけ、昨日あっているだろ！！」
しかも昨日と同じ反応ってどういうことだよ……
「冗談や冗談。大変やったな、シグナムと戦闘してバタリと倒れるなんて」
ハハハと愉快に笑っているはやて。俺にしてみれば笑い事ではない。
「しょうがないだろ、連日忙しくて疲れてたんだから。と、そんなことはいいんだ、なのは達はどこにいるんだ？フォワードにもまだ挨拶してないし」
結局、昨日挨拶するどころか顔すら見られなかったからな。
「うーん、この時間なら訓練も終わって食堂にでもいるんやないか？」

はやては少し唸ったあと、思い出したかのように言った。

「食堂か……わかった、ありがとな」

俺は、はやてにお礼を言い、食堂目指して部屋を出て行った。

第三話　フォワード

「ねぇねぇ、ティア。新しく六課に来た人、気にならない？」

食堂の円形テーブルに腰を掛けてティアナに話しかけているのは、スバルである。

同じくテーブルに腰をかけているのがキャロとエリオである。

「まあ、それなりにはね？昨日の模擬戦見る限りでは、それなりに凄い人なんじゃない？しかもその言い方、あの人知り合いか何かなの？」

スバルの質問に素っ気なく答える。

「そうだよ！」

がスバルは気にもせず勝手にテンションを上げて一人興奮している。

「スバルさん何だか凄く嬉しそう」

「うん、そうだね。フリードもそう思うよね？」

「きゃう～」

ちなみにエリオの問いかけに答えたフリードというのは、キャロの操る竜の事である。本名は『フリードリヒ』。今は子竜状態でエリオの足元にうづくまっている。

「そりゃ楽しみだよ～。だって、ただでさえ凄い人が沢山いるんだよ、六課は。それに、アークさんだってけっこう凄いんだから！」

「にしてもスバル。アンタちょっとうるさすぎよ。エリオとキャロを見なさいよ……アンタよりずっと大人に見えるわよ？それにまだ食事中でしょう……」

スバルとティアナのやり取りを見てエリオとキャロは二人顔を見合わせて苦笑いを浮かべた。
すると、食堂になのはとフェイトとヴォルケンリッターの一行が入ってくる。
一番最後について来るのは、ヴォルケンリッターの一人、盾の守護獣『ザフィーラ』である。ちなみに六課に居るときは青い犬……ではなく狼の姿である。

「あ、みんなもう来てたんだ」

フォワード四人を視界に捉えたなのはは、声をかける。

『おはようございます』

なのはから始まりそれぞれが朝の挨拶を交わすとティアナが疑問を口にした。

「あの、新しく入ってきた人は……」

「今、医務室で寝ている。そのうちに来るだろう」

シグナムが受け答えしながら、それぞれが食堂の椅子に腰をかける。

「あのー、新しく来た人って、どんな感じの人なんですか？」
先程からスバルが騒いでいたせいからか、他のフォワードメンバーも自然と六課に来た人に興味が湧いていた。
「えっと……シグナムとフェイトちゃんは面識があるんだよね？」
「ああ、そうだな。よく会うからな」
なのはの質問にシグナムは答えたが、フェイトからは返答がない。しかもさっきから、会話に参加していないようだ。
「どうしたの？フェイトちゃん？」
疑問に思ったなのはは、フェイトに顔を向ける。
「……ん？何なのは？」
フェイトは何か考え込んでいたようだった。
「ごめんなのは、話聞いてなかった」
「変なフェイトちゃん。まあ本人に会ってみればわかるよ……あっ、来た来た」
なのはがそう言いながら食堂の入口の方に視線を移す、それに吊られてフォワードメンバーも顔を向けると……
「アーク君、こっちだよ」

そこには、ダルそうに歩いているアークがいた。
アークはある程度の距離まで近づくと、なのは達の顔を見据える。
「じゃ、アーク君。自己紹介お願い」
アークは頷くと、体をフォワードメンバーの方へと向ける。
「アーク・ハルバート一等空佐だ。1日遅れてすまないが、機動六課に配属されることになった。短い間だが、よろしく」
その場にいる者の視線が一斉にアークに注がれる。あまり目にしない黒い制服を着、優しそうな表情が彼の人の良さをかもし出している。
「アークさん！久しぶりです！」
「スバルはアーク君のこと知ってるの？」
なのはは少し驚いた表情をする。
「はい！陸士隊の時に会いました」
目の前にいる人物、ルーク・ハルバートはよく覚えている人であった。
「確か会ったのが、ゲンヤさんのところに行った時だったかな？よく覚えていたね」
「はい！」
「相変わらず元気だね……」

スバルの変わりのなさにアークは苦笑する。

「で…残りの三人は？」

アークは残りの三人に目を向ける。

「！…す、すいません！ティアナ・ランスター二等陸士です！」

「よろしく」

ランスターという名前に若干聞き覚えがあったような気がしたが…

…気のせいだろうか？

「エリオ・モンディアル三等陸士です！」

「お、同じく、キャロ・ル・ルシエ三等陸士です」

「…エリオにキャロ…？あ、思い出した。フェイトが言って子達か、

よく聞いてるよ。な、フェイト？」

二人の頭を撫でながら、フェイトの方へと振り向くアーク。しかし、

そのフェイトは……

「そうですね、『ハルバート一等空佐』」

やはり、フェイトはまだ根に持っているようだった……

「じ、じゃ自己紹介も終わったところで……」

ビィーッ、ビィーッ！

突然の警報。

目の前にはＡＬＥＡＴの文字が出ていた……

第四話　ファースト・アラート？

食堂に鳴り響く警報音。目の前に『ＡＬＥＲＴ』の文字が浮かび上がっている。

「！？……このアラートは！！」

聞き覚えのある警報音。アークはそれを聞き間違えることはない。

「一級警戒態勢！？」

「グリフィス君！」

なのはの呼び声にモニターが映し出される。そこにはグリフィスがうついる。

『はい！教会本部から緊急要請です！』

『なのは隊長、フェイト隊長、グリフィス君！こちらはやて！』

別のところにはやてが映し出される。

『教会騎士団の追ってた、レリックらしきものが見つかった。場所はエイリの山岳丘陵地区。対象は山岳リニアレールで移動中』

「……移動中？まさか！？」

『そのまさかや、内部に侵入したガジェットのせいで車両の制御が奪われてる。リニア車内のガジェットは少なくても３０体、大型や

飛行型の未確認タイプも出とるかもしれへん』

（大型？飛行型？未確認？ガジェットって一つじゃないのかよ？）
アークはガジェットについての知識は全くと言っていいほどなかった。

『いきなりハードな初出動やなのはちゃん、フェイトちゃん、アーク君、行けるか？』

「私はいつでも！」

「私も！」

「俺も行ける！」

三者同じような返信をする。

『よし、いい返事や。シフトはＡ－３、グリフィス君と私は隊舎で指揮、リインは現場管制』

『はい！』

『なのはちゃんとフェイトちゃんは戦闘指揮』

「うん！」

はやての的確な指示に、さすがは若いのに部隊長するだけはある、とアークは感嘆する。

『アーク君は全体的な援護を頼むわ。何も話してへんけど、ごめん。

資料は送っとくから、移動中に見ておいてな』

「了解！」

『ほんなら…機動六課フォワード隊出動！』

「うん！…それじゃあ、みんな行くよ！」

『はい！』

長い一日になりそうだ……、とアークは呟きながらみんなの後に続き、走っていく。

第五話　ファースト・アラート？

～ミッドチルダ山間部上空・ヘリ内部～

「さて、と。それじゃ、目的地も近くなってきたし簡単に今回の任務について話しちゃうね。今回の任務はフォワード陣には初の実践任務、ってことになるんだけど――」

俺の隣に座ってたなのはが、フォワード陣の方へと向きなおって今回の任務の概要を話し始める。そして、俺は今手元にある資料をよんでいる。それは、レリックやガジェットについてまとめられたものである。

その資料を読みながら、俺の体は震えている。この震えは武者震いの類いではない。純粋な恐怖から震えている。

別に戦うことが怖いというわけではない。

なぜなら、ただヘリコプターが怖いからだ。

で、そんな怖いヘリコプターに、なぜ乗るはめになったかと言うと……

ガジェットが出現している山岳に向かうため俺はみんなについていった。六課についてはメンバー以外何も知らされておらず、移動方法がまさか『アレ』だとは知らなかった。

「ま、まさかだとは思うが……山岳まで『ヘリコプター』で行くの？」

視界に捉えたものは、ヘリコプターだった。

「そうだよ！じゃ、早く皆乗っちゃって！」

なのはは笑顔でそう答える。俺から見たら、その笑顔は悪魔のように見える。

「おいおい、冗談じゃないよ……」

絶望に支配され始めたアーク。そして、アークはヘリコプターに乗らずに任務をする解決策を思い付いた。

ライセンスを使えば、飛行許可を取らなくとも、飛ぶことができる。

それに気付いたアークは、走りヘリポートの端へと走り始める。

「行かせないよ……」

突然、後ろから声が聞こえた。それは紛れもなく知っている人の声だった。

「え？」

いきなり聞こえた声に俺は情けない声を出してしまう。

そして、制服の襟を掴まれる。それが首を締める形となっつしまい、またもや変な声が出る。

「グヘェ！」

「まさかとは思うけど……みんなと一緒行動するよね？同じ六課の仲間なんだよ？」

背中に寒気がする。ゆっくり後ろを振り向くと、そこにはどす黒いオーラを纏った黒い死神がいた、つまりはフェイトである。

「ハハハッ、そんなこと……ないんじゃないかな？」

乾いた笑いをしながら誤魔化す俺。しかし、そんなバレバレの嘘を信じるわけもなく、そのまま俺はヘリコプターへと引きずられていく。

ちなみに、俺は自称『ヘリコプター恐怖症』である。それを知っているからフェイトは逃げようとした俺を無理矢理止めたわけだ。いくらなんでも根に持ちしぎでしょ？と言おうとしたが、なにされるか知ったことではないので言わないでおく。俺だってまだ死にたくはない。

そして、現在にいたるわけだ。

「ヴァイス君。フェイト隊長とアーク君と一緒に空を抑える」

え？俺も？と言いそうになったが、ヘリコプターから降りられるならなんでも良かった。

「ウッス、なのはさん。お願いします」

グッと親指を立てて答えるヴァイス。

ヴァイスがパネルを操作しメインハッチが開く。

「じゃ、ちょっと出てくるけどみんなもズバッとやつけちゃおう！」

『はい！』

「は、はい！」

キャロが少し遅れて返事をする。いかにも緊張しているようだった。

「キャロ。そんなに緊張しなくても大丈夫だよ」

「あ……」

俺はキャロに歩みより、そっと手を頭にのせる。

「離れていても通信でつながっている。一人じゃないから……危なかったら、俺やなのは、フェイトだって助ける。だから心配すんな、それにキャロの魔法はみんなを守ってあげられるような力だろ？」

そういい、ヘリコプターの後部のハッチへと歩いていく。そこには、俺を待っていてくれたのかなのはとフェイトがいた。

「じゃ、行きますか……」

俺がそう呟くと二人は答えるかのように頷いた。

ハッチからは相変わらず、凄まじい風が身体を打つ。

……これ、高所恐怖症だったら卒倒もんだよな。

と考える余裕があるというか、それとも緊張感が足りないというのか、どちらだろうか。

「アーク・ハルバート、出る！」

そして、俺達三人はハッチから、俺、なのは、フェイトの順番にヘリコプターから降りていく。

ハッチから飛び出すと同時に、バリアジャケットを展開しガジェットが現れた方向へと俺達は飛翔する。

第六話　ファースト・アラート？

ヘリからいち早く出撃した俺となのは、フェイトは視界にガジェットを捉えた。

「アーク君は前方を。私は左、フェイトちゃんは右へ」

平行して飛んでいる俺達になのはは指示する。

「了解」

「わかった」

そう言いフェイトは右へ、なのはは左へと飛んでいく。

それを確認したアークは、戦闘体勢になる。

「けっこういるな……ざっと、６０か７０くらいか……」

前方へと視線を向けると、数えるのが面倒くさくなる数のガジェットが見える。しかし彼にはその程度の相手は朝飯前なのだが。

「さっさと終わらせるか」

アークは右手を横に切る。すると右手に握られているアイリスから魔力刃が展開される。

「……」

機械的に標的を狙うガジェットの弾幕を掻い潜り、先へ先へと進む。接近して切りつける。ガジェットは切り付けられると、まるで紙のように容易く真っ二つにされ、爆発する。反撃する隙すら与えない怒濤の攻撃。
結局３分足らずで彼は６０から７０くらいの数のガジェットを殲滅した。残ったのは一人の男と崩れ落ちていく鉄屑だけ。

「……だいたい片付いたか」

ふう、と息を吐き出し周囲を警戒する。残っているとしたら、フェイトとなのはの回りにいるのと、リニアの中にいるガジェットくらいだろう。
彼は、まだ残っているガジェットを殲滅するために飛び始める。

ドォンッ！と空中で爆発音が轟く。それはガジェットから出たものだった。
爆音の中心に立っていたのは、白いマントに黒い服のバリアジャケットに身を包むフェイトであった。

「さっきはちょっとやり過ぎたかな……」

フェイトは自分がしたことを少し後悔していた。無論、アークにしてしまったことに。

「嫌われたりしてないかな？」

その問いに答えるものなど、もちろんそこにはいない。
突然、後ろから機械音が聞こえた。普通なら気づくはずのものにフェイトは気づくことができなかった。
何故なら、フェイトは戦闘中に俗に言う考え事をしていたからだ。
後ろを振り向いた時にはもう既に遅かった。ガジェットは完璧にフェイトを捉えていた。

「！！…まずい！」

とっさに動こうとしたがいくらフェイトのスピードでも間に合わない。

（クッ…間に合わ…）

ガジェットがレーザーを放とうとした瞬間――――一筋の光がガジェットを突き抜ける。

「…えっ……？」

フェイトは何が起こったのか一瞬理解できないでいた。ガジェットをいきなり何かが切り裂いたのだ。
しばらくすると煙が晴れ、自分の上方向に誰か立っているのが見える。
フェイトはその姿に見覚えがあった。
そうその姿は……

「…アー…ク…？」

そこには黒いバリアジャケットに包まれて、右手にデバイスを握っ

ているアークがいた。

「まったく……今のは流石に危なかったぜ？」

あきれた表情にも見えるアークの顔を見て、フェイトは軽くイラっときた。

「い、今のは…アークのせいだよ！」

そうアークのせい、アークが私を悩ませるから、っと心の中で自分にいい聞かせるフェイト。

「え？俺のせい？」

それを聞き、はとが豆鉄砲を食らったような顔をするアーク。やはり、というべきかフェイトの心情を察することができないアークであった。

「あ、ちょっとフェイト！」

アークの質問には答えず、フェイトは違う場所へと飛んでいってしまった。

「ヤバいな……かなり怒ってるかも」

さらに悩むアークであった。

その後無事、フォワード陣がレリックを回収し帰還することができた。リニアの件は無事解決した、しかし俺の問題は解決していなかった。

先の一件の諸々の処理を終えたはやてとアークは部隊長室にいる。

「ごめんな、いきなり出撃なんて」

はやては申し訳なさそうに言う。

「いや、問題ないよ。この程度じゃ疲れないしな」

ティーカップ片手に彼は微笑んだ。

「そうか、ならよかったわ」

「部隊、けっこういい感じだな。新人もガジェット相手に互角以上に渡り合えるなんて」

アークは紅茶を一口飲み、ティーカップをテーブルに置いた。

「それはなのはちゃんの教導のおかげや」

嬉しそうに笑うはやて。やっぱりこうして見ると部隊長とは思えない。ただの女の子だ。

「アークくん。明日から訓練の手伝いをお願いできる？」

「新人達のか？まぁ、それも悪くないな」

彼は何も異論はないと快く承諾した。そもそも彼が人の頼みを断ることは滅多に無いんだが。

「っていう訳で明日からはアークくんにも訓練に参加してもらいます」

「了解」

アークは微笑む。

「じゃ、はやて。俺は部屋に戻るよ。まだ荷解きしてないからな」

そういい、アークはすたすたと自分の部屋へと歩いていく。

第七話　進展

山岳での一件から次の日。

「ふぁ～…眠い」

早朝訓練をヴァイス、シグナムと眺めていながら、気だるそうにあくびをする青年。無論、今までの機動六課ならいなかった人、正体はアークである。連日寝不足なのに、昨日荷解きをしたせいで今日も寝不足気味だ。

「いやぁ～やってますなぁ！」

「初出動が良い刺激になったのかもしれんな」

ヴァイスとシグナムは感心しついるように言う。

とそこで、アークに呼び出しがかかる。

「あ、そろそろ行かないとな」

とぼとぼと、新人達がいるところへと歩いていく。

「じゃあ、みんなには今からアーク君と模擬戦をしてもらいます」

「模擬戦ですか？」

「うん、四対一でやってみようか」

アーク達はなのはを先頭に大型訓練場に移動した。

「やっぱり良くできてるよなぁ」

アークは周りを見渡してあまりの凄さに感心する。

「場所は市街地。直撃をくらった時点で終りね」

「なぁ……なのは」

説明をするなのはを見上げて彼は言う。

「四対一？一って俺のことか？」

「そうだよ。それにアーク君なら大丈夫でしょ？」

笑いながら彼女は言うが、来てまもなく四人相手をするのは正直厳しかった。

「おいおい……本気かよ」

「じゃあ頑張ってね。レディ……ゴー！」

聞く耳持たずなのはの合図とともに戦いの火蓋は切って落とされた。

「まずは……様子見かな」
彼の最初の行動。それはただ立っているだけだった。

「相手は格闘型か……やっぱりいつも通りにいくしかないわね」
フェイクシルエットを作り出しながらティアナは呟いた。
『なのはさんとのシュートイベーションのやり方？』
「そう、それが一番確実なんだけど」
少し彼女は考えた。相手は格闘をメインにして飛行出来る。しかし、一向に仕掛けてくる気配はない。
「やるしかないわよ」

「……来たか」
ビルの窓からオレンジ色の魔力弾がアークに向かって飛んでくる。
それをアイリスで魔力弾を真っ二つに切り、消滅させる。

「うおぉぉ！」

青い道がアークの前に現れ、その上をスバルは駆け抜け、その拳が今にもアークを貫かんとする。

「……チッ」

すれすれで横にとび攻撃をさけ、数発の魔力弾を形成する。

「行け！」

彼の言葉を受け、魔力弾は不規則な弾道でスバルに向かう。

「うわっ！？」

一発目は間一髪回避し、残りは全てシールドで弾き返した。しかし、彼の攻撃はその程度では止まらない。

「スバル、狙いが甘いぞ」

アークは一瞬でスバルの目の前まで距離を詰め、剣戟の応酬。

「は、はやっ！？」

困惑するすばるだが、そんなことを言っても始まらない。彼の攻撃は一発一発が正確でまともに避けることは出来ず、受け流すので精一杯だ。

「ティア援護〜！」

泣きつくような声でスバルはティアナに救援を求めた。

『今から援護するから、合図したら離れて！エリオ、キャロ準備はいい？』

『『はい』』

「確かにいい腕だ、だが終わりだ」

彼の姿がスバルの視界から消えた。それに気付いたスバルはもう時すでに遅し。首に手刀を一撃。これで勝負はついた。

倒れるスバルを抱き抱え、端に寝かす。そしてこちらを狙うティアナに逆に狙いをつける。

「……アイリス」

《ｏｋ．ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ》

彼がそう呟くと、剣を形取っていたアイリスが、黒い二丁銃へと形を変える。

危機を察知したティアナはすかさず魔力弾を撃つ。

「無駄だ……ガトリング・バースト！」

二丁銃からマシンガンのような速さで魔力弾が連続で撃ち出される。その魔力弾はティアナの魔力弾を全て貫き、そのままティアナを直撃した。威力、精度全てが新人達とは比べ物にならない。

「あとはエリオ達か」

ティアナとスバルの安全を確認すると、アークは市街地の中を一人で歩いていく。

「圧倒的だな」

「そりゃあれだけ強ければ新人達じゃ手も足もでないだろ」

隊長陣とヴァイスが模擬戦の様子を眺めている。

「残るはライトニングだけか……フェイト隊長はどうみる？」

「多分エリオじゃまだ太刀打ち出来ないかな。キャロはガチンコにはあんまり向いてないし」

昨日の不機嫌そうな様子とは打って変わって穏やかな本来の彼女のようだ。

「お、チビ達と接触しますぜ」

ヴァイスが声を上げ、みんなの視線がモニターに集中する。

彼はあえて自由落下を選択してエリオと対峙した。好機と思ったのか、キャロのブーストを受けたエリオはストラーダごとアークに突貫した。

「いっけぇっ！」

正面から激突し爆風が巻き起こる。着地したエリオの視線の先には平然と宙に浮かぶアークの姿があった。

「いい攻撃だが……力不足かな」

エリオは自分を上回る高速機動に翻弄された。右にいたかと思えば左から。また逆をつかれて後手後手に回ることになる。

「くそ！」

ストラーダで受け、なんとか耐えるものの、そこは大人と子供。腕力の差がもろに出てしまう。

「ハァッ！」

ガードを破った彼はエリオの腹部に膝蹴りを入れた。エリオはこれでもかというくらい吹っ飛び、ビルに激突した。

「エリオくん！？」

心配するキャロであったが、すぐにそれどころではなくなる。気付くとアークが後ろにいて、キャロは意識を失った。

「容赦ないなアークも」

シグナムは苦笑いしながらモニター越しにアークを見つめている。モニターに映る彼はこちらを見つめ返してるように見えた。

「まぁ、これて新人達にもいい経験になっただろうな」

「そりゃあんなオールレンジアタッカーなんてフェイトさんぐらいですからね」

「うん……でも格闘や射撃の技量ならアークの方が上だよ」

フェイトは真剣な眼差しで答えた。以前一緒に仕事をしたときよりも、動きが一段と良くなっていることに気が付いたのだ。

「まぁ、私たちも今は魔力運用の上手さでなんとかしてますからね」

溜め息混じりに笑って話す彼女の瞳には、彼の力が確実に新人達のためになりという確信が見え隠れしていた。

「さて、私たちは仕事に戻るとするか」

「うっす、姐さん」

シグナムの後ろにヴァイスはついていく。

「あたしらもあっちにいくか」

「そうだね」

やっとスバルたちも目を覚ましたので、なのは達はアークのいる位置まで移動した。

「けっこう骨があるな……」

どこも疲れてなどいない。しかし彼は身体を伸ばし、薄く笑った。

「嘘つけ、余裕じゃんかよ」

アークに近づきながらヴィータが話し掛けた。

「あれ、聞こえてたんだ……」

すると意識を取り戻した新人達がなのはに連れられてやってきた。

「じゃあ、アーク君。模擬戦の感想を」

「まず、お前は突っ込みすぎだ。もっと考えて行動しろ。あとは精度を上げるんだ。格闘に関しては……まぁ妥協点かな」

スバルを見つめながら説教のように話していく。それを聞き手も熱心に聞くので話しても本気で話のだが。

「はい！ありがとうございます！」

オーバーなアクションで頭を下げる。風切り音が聞こえた気がしたが気にしないことにした。

「次にティアナ……？」

「……？あの……どうかしました？」

「いや……お前はもっと射撃の腕を磨くことだな。磨けばあんなところで落とされないだろうし、援護ももっと出来るはずだ」

ティアナを見つめ、一瞬戸惑いを見せたアークだがすぐに元に戻り平然を装う。

「はい！！」

「あとは……あれだな、小隊の指揮官をやるつもりならもう少し臨機応変に動け。俺を格闘型と見て作戦を立てたのはまぁいいが……射撃をし始めたら、かなり動きが乱れたろ」

アークは目を閉じ、眉間に指をあて考え込んでいる。

「……」

彼女は俯き握りこぶしに力を入れてフルフルと震えている。現実を突き付けられ、何を返せばいいかわからないのだ。

「精進することだな」

次にアークはエリオの方に身体を向けた。

「エリオはもう少し槍の扱いを上手くならなきゃな。筋力の差が出るのは仕方ないし、無理に鍛える必要はないよ。技量があれば筋力差なんて関係ないからな」

エリオに近づいて頭を撫でる。ツンツン跳ねた髪の毛が潰れて元に戻る。

「はい、ありがとうございます！！」

スバルに負けず劣らず元気な様子にアークの頬も緩む。

「最後に君は……多少近距離の射撃を覚えたほうがいい。いくらバックスでも前線なんだから敵と直接戦闘が有り得るからね」

「ありがとうございます」

こちらはエリオとはある意味対称的に、丁寧にかわいらしい礼をしている。

「でも、皆いい感じだ。これからも頑張れよ」

彼は新人たちの返事を待たずに後ろを向き、ひらひらと手を振り去って行った。

第八話　邂逅

今回のレリック事件の犯人がジェイル・スカリエッティという可能性をフェイトがみつけてから二日後。俺となのはとフェイトは、はやてに部隊長室に来るように言われた。

「わるいなぁ、いきなり集まってもらって」

悪いと思っているなら呼ぶな、と言いたいが今、口論になるのは避けたかったので言うのを耐えた。

「で、どうしたんだ？いきなり呼び出すなんて」

アークの質問にはやては真面目な顔になり用件を伝える。

「三人に任務を言い渡そうと思うてな」

《任務》という言葉に三人に緊張が走り、はやての指令内容を聞く。

「ジェイル・スカリエッティに関係のある研究施設を発見したんや。そこの調査をしてもらいたいんよ」

はやてがそう言うと、アーク達の前にモニターが現れ、施設の場所が載っている地図が映し出された。

「はやてちゃん、ジェイル・スカリエッティの調査はフェイトちゃんの役割じゃなかった？」

なのははフェイトがスカリエッティを追っている事を知っているため、疑問に思う。

「それでもいいんやけど、誰も行ったことのない場所やから。一人で行かすのは心配なんよ」

確かにはやてが思うのも無理はない。相手は何をしでかすかわからない犯罪者だ。恐らくフォワード陣を連れていかないのはそのためだろう、とアークは考えた。

そして、アーク自身スカリエッティとは縁がある。

あまり人に話せるような良い縁ではないが……

アークはそんなことを思い、溜め息をつつ、三人は任務を了承した。

「久しぶりかな、フェイトと任務するのも……」

今、アーク達ははやてに指示されたスカリエッティの研究施設と思われる施設が発見された場所から、5キロ程離れた場所にいた。

そして、アークは隣にいるフェイトに話しかける。

「フフ、そうかもしれないね」

アークと久しぶりに任務に出れたことに対してか、いつもより上機嫌なフェイト。二人の任務とは山岳事件のことはふくまれていないようである。

しかし、任務に向かったのは二人ではなく三人である。そこを忘れてはいけない。

「アークくん、フェイトちゃん……仲良くするのはいいんだけど……私もいること、忘れちゃダメだよ？」

二人の後ろにはもの凄い形相をした魔王…もといなのはがいた。
それでも二人は反省する気もないのか、なのはが言った言葉に顔を赤く染めるだけであった。

しかし、そんな緩んだ雰囲気をぶち壊すかのように、周りの茂みから無数のガジェットドローンが現れた。
それは、ここに研究施設があると教えているようなものである。

「チッ！ガジェットドローンか。フェイト、なのは！散開して叩くぞ！」

急な敵襲に全く動じない三人。無駄に戦いの場数は踏んでいない。
なのはとフェイト。二人はアークの言葉に頷くと別々の方向へと、飛び立って行く。

「ったく、スカリエッティもこりねぇな……こんな趣味悪いモノをバカみたいに造りやがって。しかも触手みたいの付いてて、教育によろしくないね」

ガジェットドローン達はアーク目掛けて飛んでくる。
その数３０体。
アークはガジェットドローンを見下しながら、左手で頭をポリポリとかく。その顔はどこか面倒くさそうなように見える。
そして、気持ちを切り替えるかのように口の端を吊り上げ、言う。

「ちょっくら、頑張ってみますかね」

そういうやいなや、アークはアイリスをモード・ビットにする。すると、アークの周りにビットが集結し、その中心に黄色い魔力が集まり魔法陣が展開され、大気が震えた。

そして、解き放たれる。

「ヴァジュラス・ブレイカー！！」

アークがその魔法の正体を言った瞬間、ビットの中心から黄色い電気を纏った光線がガジェットドローンがいる方向へと突き抜ける。それは、いくつものガジェットドローンを貫通する。しかし、それだけでは止まらず、砲撃魔法があっていない周りのガジェットドローンも破壊されていく。なぜなら、砲撃魔法に電気が帯びており、そのエネルギーにより、ガジェットドローン自体にダメージを与えるからである。

しかし、それでもガジェットドローンは一掃出来なかったのか、まだ数体は残っている。

「まだいんのかよ……それなら」

アークは、アイリスを魔力刃の状態に形態変化させ、その魔力刃は強く、輝きはじめる。

それをアークは確認する。

「フラッシュ・メッサー！」

アークはアイリスを横凪ぎに振るう。アイリスの刃の部分から魔力斬撃がうまれ、一直線にガジェットドローンを両断した。

周りに敵がいないことを確認したアークは研究施設へと向かっていく。

「やっぱり、はやての言う通りスカリエッティの研究施設かもしれないね」

研究施設の入り口付近。フェイトは周りのガジェットドローンの残骸を見渡しながら言う。ガジェットドローンが集中している、つまりスカリエッティが関わっていることは一目瞭然だった。

「……」

「どうしたの？アークくん？」

さっきから黙っているアークを見かねてか、なのははアークに問う。それに気付いたアークは徐に口を開く。

「いやね、こんな簡単にスカリエッティの研究施設が見つかるのかな？って思ってさ……むしがよすぎる気がすんだよ」

その言葉に二人は少したじろぐ。

「それはいくらなんでも考えすぎなんじゃない？」

そんなフェイトの意見を聞き、アークは肩をすくめながら「そうだな」と答える。

「でも、入って調べなきゃ、なんもわかんねぇからな」

行こうか、と言いアークを先頭に研究施設に入ろうとするがいきなり足を止めた。どうしたの？、とアークはフェイトの口を左手で塞ぐ。そのいきなりのアークの行動にフェイトはあたふたしたが、フェイトにも理解した。
アークは自分たちに近づいてくる気配を感じとったのだ。相手も気付いているとアークは考え、いつもより少し低い声で近づいてくるものに問いかける。

「誰だ！？」

しかし、それでも徐々に気配は近づいてくる。
そして、その姿が視界に写った。研究施設の周りにある森から出てきたのは、赤いバリアジャケットに身を纏った男。粗野に見える顔だち。波の打った赤い長髪。

「何故だ……何故オマエがここにいる……」

その顔だち。

その雰囲気。

あの男だ。

髭が伸びても印象が変わっていても、見間違えるはずがない。

あの男だ。

俺の……いや“俺達”の運命を狂わせた男。

「カロッサ・コーネルド！！」

第九話　内より出でし者（前書き）

やっと出したかったキャラが出せました。
原作キャラが空気になりかけてる！って自分は思います。
あと、もしアドバイスがあれば、いつでも言ってください。

第九話　内より出でし者

「何故だ……何故オマエがここにいる……カロッサ・コーネルド！！」

アークに握られている、剣型のアイリスが小刻みに震える。
この数奇とも言うべき運命に、アークの心は千々に乱れていた。
そしてそのアークの異常な雰囲気に、フェイトとなのはは驚愕する。
今までのアークとは考えられない程に、違っていた。

「ほぅ、この俺の名前を知ってるとはな……相当の情報通だな」

愕然としているアークに、カロッサが続けて言う。

「しかし、こちらとてクライアントからの指示があるんでね……ここに来たヤツは殺さなきゃいけないんだ。だから、お話は終わりだ」

カロッサはつまらなそうにそう言うと、両手に刀身だけでも2メートルを優に超える、赤いバスターソードのようなデバイスを出現させ、握る。　血を吸わせながら鍛えたかのようなその真紅の剣は、ただのデバイスとは違う、どこか生々しささえ感じる。

「フェイトとなのはは少し離れててくれ、アイツは危険だ！」

カロッサの行動に呼応するかのようにアークは、アイリスを構える。

「でも、それじゃアークが……」

熟練。全距離戦闘をたったの一人でこなす、ライセンスのアークが『危険だ』と言ったのだ。それほどの敵なら、複数で戦った方がいい。そう思ったフェイトがアークに提案する。だが。

「これは俺の問題なんだ……アイツは……」

アークはフェイトの言葉を途中で遮り、さらに続ける。

「父さんと母さんを、目の前で殺したヤツなんだ！！」

吐き出すように言ったアークの言葉を聞いて、そしてその衝撃的な事実を知り、フェイトとなのははそれ以上何も言えなかった。

「父さん？母さん？……あぁ……そうかい、見たことあるヤツだとは思っていたがな。やっぱあん時のガキか！」

過去の出来事を思い出したか、その顔には喜びに近い表情が浮かぶ。口調も、少々変わったように聞こえる。

そしてカロッサは、バスターソードを突き刺すように構えてアークに迫ってきた。鋭い切っ先が光る。

飛ばないのは、地上の方がバスターソードの有用性が高まるからだろう。大型の西洋剣であるバスターソードは、その長い刀身に必要

最低限の切れ味だけを持たせ、重量に任せて相手を『斬り潰す』武器だ。身振りが細く、扱いやすくなった斧と言ってもさほど間違いではないだろう。だとすれば、あらゆる角度からの多様な攻撃が求められる空中戦より、常に一定の方向を『下』とする地上の方が有利なのだ。
ただし、カロッサが全く空中戦を行わないとは限らない上に、わざわざ扱いにくい得物であるバスターソードをデフォルトとして構えるのだ。
つまりは、それなりの実力があると言う事だ。
だが、アークはそれを知った上で飛ばない。地上が相手の戦場であると分かっていながら、同じく彼は地上でそれを迎え撃つ。

「だったら、俺を知っていてもおかしくはねぇよな！」

アークはカロッサの凶刃をアイリスで受け流すと、そのまま交差しようとするカロッサに向かって、左足を少し引く。胴ががら空きだ。その上、相手の得物は大振りのバスターソード。これなら間に合わない。
空いたその隙に蹴りを入れようと、アークは魔力を込めて威力を上げた左足でカロッサの胴を蹴りあげた。しかし、カロッサはすばやく反転すると、

「ちょいさぁ！」

アークの左足を、カロッサが自分の右足で踏む。アークの蹴りは軌道がズレ、カロッサに当たらず空気を切る。黄色の魔力の残滓が浮く向こうで、カロッサは心から楽しそうに笑っている。

（この動きっ……！）

やはり、変わっていない。少年時代、カロッサと対峙した時と……。
アークは、ぎり、と奥歯を噛んだ。
だからどうした、と。

「それならっ！」

アークは、たたらを踏むようにゆらりと身体を左右に揺らすと、一足、敵に向かって飛び込んだ。カロッサが後退して距離をとったのに対して、アークはさらに踏み込んでアイリスをつき出す。
すると、カロッサはバスターソードを左に大きく構え、右後ろに素早く引く斬り払いでアイリスを弾き飛ばす。無駄な力が入っていない、『近すぎる位置に居る敵』のための妙技に、アークの右手のアイリスが地面に突き刺さる。
同じだった。少年だったあの頃、カロッサに地面に叩きふせられたのと同じ……。

（あの時と同じだ……結局俺は、またヤツにやられるのか…？）

アークの頭の中に、『死』という概念がよぎる。
今度はカロッサが突っ込んで行く。アイリスで受け止めようにも、地面に刺さってしまって動けない。その行動がアークの判断を遅らせた。
カロッサに正面から魔力を帯びた体当たりを受け、そのエネルギーでアークに衝撃が走り、吹っ飛ぶ。

「グハッ！！」

何本も生えている木々の内の一本にアークは背中から激突し、肺の

中の空気が全て吐き出される。
周りにいるであろう、フェイトとなのはの声が薄々聞こえてはいるが、朦朧としたアークには何を言っているかわからない。
彼の五感が捕えていたのは、ただ視覚から送られてくる、血濡れの大剣を持った男の姿のみ。

「ハハハハハ！終わりだな！」

カロッサは、ゆっくりとアークへと近づいていく。

（……結局俺は、家族の仇を討てないまま死ぬのか？）

――ここまで来て諦めんのか？

アークの頭の中に、声が響く。

（なぜ…このタイミングで）

――死にたくないんだろう？だったら貰うぜ、身体の主導権をな。

（やめろ……今、出たら……！）

――俺はただ生きてぇだけなんだ。お前の意志なんか関係ねぇよ。

「んだよ、抵抗すらしねぇのかよ……それなら、逝っちまいな！」
カロッサはそう言うと同時に、赤いバスターソードを頭の上から力の限り降り下ろす。この剣の本当の威力を発揮する、本当の使い方。一見幼稚に見えるこの振り下ろしは、重力を剣に上乗せする一撃必殺の技。カロッサの力が加えられたそれは、ただ地面に当たっただけでも軽い地震を生む事が出来る。いや、衝撃に空気が乱れる事もあるだろう。
絶対に死んだ、と確信したカロッサ。
だが。
「なに？」
それは意外にもアークに当たることもなく防がれる。
口から出た言葉には驚きの念を感じられないが、カロッサ自身、まさか今の攻撃を防がれるとは思っていなかった。一瞬、他の魔導師が防いだという考えが頭の中によぎるが、その考えは自分が見た光景により違うことが証明される。
そう。カロッサが見た光景とは、彼の振るう赤いバスターソードを、アークが黄色の剣で防いでいるというものだった。
だがなぜ、あの振り下ろしが防げた？あんな状態から反応できるなんてありえねぇ！
確かに、そうカロッサが思うのも無理はない。カロッサがアークの目の前から放った攻撃は、速度を考えたら秒として数えることもできない一瞬の出来事。いくら歴戦の戦士でも防ぐことも愚か反応することだってままならないことだろう。なぜなら、反応できる人間のスペック上の限界点を超えているのだから。それに加え、威力も桁違いなのだ。地を震撼させ空気を乱すほどの威力を、仮に反応で

来たとしても防ぐ事はやはり不可能。
どれだけの経験や才能があってもたどり着けない場所。それほどのことができるのは、もはやただの人間ではないだろう。そう、“ただの人間”でなければ……。

「ククククク、簡単に身体を渡してくれるとはなぁ」

口調が変わっていた。まるで檻に閉じ込められた猛獣が唸るような口調だ。
目付きが変わり、その両目はいつもの落ち着いた紺色ではなく、燃えるような赤色に染まっている。
目の色が変わる……それは“ただの人間”ではありえないこと。

「誰だ、オメェは！？」

バスターソードを受け止めているアークの雰囲気がいきなり変わり、感覚的にその言葉を口に出す。

「俺かぁ？」

どう考えてもアークとは思えない人格が呟く。
それと同時に、カロッサは長年に渡って培ってきた感から身に危険を感じ、とっさにアークと思わしき人物から離れる。その距離５メートル。

「俺は……ルークだ！！」

ルークと呼ばれる人格は、まるで檻から解き放たれた獣のようだった。

第九話　内より出でし者（後書き）

前回、アークが使った魔法について説明しておきます。

ヴァジュラス・ブレイカー
砲撃魔法。あえて言うならディバイン・バスターみたいなもの。砲撃の回りに電気がまとわりついており、当たっていなくとも周りにダメージを与える。

フラッシュ・メッサー
アイリスの剣型の状態のみ使えることができる魔法。魔力斬撃を飛ばし相手を切ることのできるもの。小規模だが切断力は高い。

第十話　第二人格（前書き）

久しぶりの投稿です。
変なところがなければいいのですが・・・
あと、感想待ってます（＾＾）

第十話　第二人格

「俺は……ルークだ！」

ルークと名乗る男は、まるで獣のような獰猛な声だ。　戦闘狂、とでも言うべきか。名乗りの時点で、既にそう思わせる異質な気配を発している。一見同じ人物なのに、この一瞬で少年の何もかもが破綻し新しい人格・思考が造られたかのような。
つまるところ、アークとはまるで違う人格。

「ルー……めんどくせぇ、名前なんてどうだっていい」

しかしカロッサは興味無さそうに返すだけだ。これから殺すつもりの人間の事など、知るつもりは毛頭無いのだ。彼はその両手に握っている、血濡れの気色を纏った大振りのバスターソードを頭の位置まで上げる。

「さっきは殺れなかったが……次はちゃんと殺してやるよ！！」

そしてルークは、先ほどと同じく空気を震撼させる必殺の振り下ろしを執る。
当たれば即死。
当たらずとも、木々を削る轟の乱気流により死を迎える。
ただでさえそうだと言うのに、先ほど防がれたのを意識してさらに威力を増している。
その一振りには、死しか存在しない。
……筈だった。

未だ木に上体を預けているルークは、それが来るのがわかっていたかのように剣形態のアイリスを構え、バスターソードを迎え撃つ。
この瞬間カロッサ・コーネルドの顔に浮かんだ殺人に対する愉悦の笑みは、次の瞬間には疑問を帯びたものへと変わっていた。
互いの剣がぶつかり合えばその刹那、圧縮・膨張を繰り返す空気の衝撃で全てが消し飛ぶ。
だが。
ライセンスの男が持つ黄色の剣は、一瞬だけ、紅色の大剣と拮抗した。
拮抗したのだ。
血の気色を持った大振りの剣は、近づくだけで敵を粉砕する。にもかかわらず、ルークは未だカロッサに獰猛な獅子の目を見せている。
歪んだ口元は、先ほどまでカロッサが彼に見せていたものだ。
敵を殺す事に対する、愉悦。
どうやったのか、轟の乱気流はただの突風レベルにまで抑えられ、地を崩す血濡れの一撃は細身の剣に止められた。
ライセンスの男は、冗談では無く、化け物だ。
だがどのような怪物や化け物であろうと、その実態は二足で地に立つ肉体。そもそもの威力と重量が高いバスターソードに、アイリスを支える手と腕が震え、徐々にルークは押され始める。細身のアイリスが大振りの剣と真っ向から勝負をすれば質と量に推されて負ける。

「……チッ！」

ただ正面から獲物を交わせ合うだけでは無駄に体力を消耗するだけだとルークは考え、状況を打開するために彼は『技』を使う。アイリスから力を抜き、バスターソードを受け流した。それと同時に横へ転がり、起きざまに単純な魔力弾を撃ちながら後退する。とっさに振り上げの一刀で電気の球を斬ったカロッサは、仕留め損ねた自

らの獲物を視界の中央におく。共に死闘を望む両者のその距離、おおよそ１０メートル。　二点を結ぶこの直線上は、文字通りデッドライン。

「「殺す！！」」

二人は同時に感情の高揚を促すその言葉を叫ぶと、それを合図にルークとカロッサは地面を強く蹴り、次の瞬間には鍔迫り合いをしながら互いの目を見ていた。
獅子の獰猛さを感じる、小剣使いの男の目。
大蛇の冷徹さを覚える、大剣使いの男の目。
どちらも、人の目をしていない。
今の二人は、ただ己の眼に映る敵を屠るためだけに存在していた。
それだけが、ルークとカロッサの本能と化していたのだ。
ルークは迫り合わせているバスターソードの軌道に注意しながらアイリスを引き戻し、再びアイリスを振りかざすと思いきや、フッとその姿がカロッサの視界から消える。

「、……っ？」

カロッサはそれに眉をひそめながらも、不用意な挙動はとらずに、血濡れの色彩を持った大剣を横に構えて静止する。この体勢ならば、どこから攻撃が来ても対処が可能になるのだ。そのままカロッサは神経を尖らせ、ルークを探そうと目だけ動かして辺りを見る。ルークが先ほどまで居た場所には、淡く電気の残滓が残っていた。瞬時短距離移動か、それともその変換資質を使って強化した肉体でどこかへ跳んだのか。
どちらにせよ、近くに居る事は分かっていた。
相手が逃げる可能性も、無い。
その時、カロッサは背中に気配を微かに感じた。

俗に、殺気と呼ばれる類のものだ。
彼は右腕に力を込めながら、バスターソードを大きく振りまわす。
が、いない。空を切った紅いバスターソードは、あの男の血を滴らせてせていなかった。
舌打ちをしそうになったカロッサだったが、それよりも先に大きく後方へ跳ぶ。
これが罠であると言う事くらいは、簡単に分かる。
そして離れたと同時に、彼が立っていた場所に一筋の閃光が横切る。
その閃光の正体は、言わずと知れている。ルークに握られているアイリスだ。ルークは剣を振るった体勢から、流れるような動作でカロッサの方向へと跳ぶ。

「うおぉぉぉ！」

ルークは喉が千切れんばかりに声を上げ、カロッサへと剣戟を繰り出す。
速く、鋭く、重く。
小剣の利を生かした攻撃からは、それに不相応な威力が出力されている。いや、そう見えているだけなのだ。ルークは『一撃一撃が重い』のではく、『超高速で同個所に複数の攻撃を当てることによって驚異的な突破力を生んでいる』のだ。
もはや、その剣戟は剣戟と呼んでいいのかわからない程に速かった。
さしものカロッサも、『やっと』かわしているほどだ。
大蛇が、獅子に仕留められそうになっていた。

（どうなっていやがる……！？　さっきとは比になんねぇスピードだぞ！！）

ルークから連続に放たれる速すぎる剣の舞。時に突き、時に斬り、しかし今どちらを行ったのかすら分からない。

『技』による攻撃か。
『力』による攻撃か。
それすら分からない。
そしてついに、カロッサの体に所々、切り傷が見受けられ始めた。

「ハハハ、そろそろ限界なんじゃねぇのか！？カロッサ・コーネルド！！」

赤い線に同色の球が浮かんでいるのを見て、ルークは高速の剣戟を繰りだしながら焚き付けの気色を忍ばせた台詞を言う。まるで余裕だった。そう思うのも当然だ。彼が放つ剣戟の応酬は、カロッサに着々とダメージをいれている。油断はせず、むしろ自分が有利な立場に立っていることから緊張と言う名の無駄な力が抜けて行き、より攻撃に柔軟性が付加される。

「調子に乗るんじゃねぇぞ、クソガキがっ！！」

カロッサも何もしないまま終わるものかと、得意のトリッキーな戦方を起こす。が、全てルークのアイリスにより弾かれ、防がれ、反らされる。まともな余裕の無いカロッサが無理に攻撃に移ったのが裏目にでたのか、またもやルークに押され始める。
切り下ろし、突き、切り上げ、横凪ぎ。一体、一回の攻撃に何回の動作を仕込んでいるのだろうか。
分かっているのは、全てが人間のスペックを明らかに越えている攻撃だという事だけだ。
肩を切られ、脇腹を突かれ、腿を裂かれ、また肩を切られる。

（……？）

カロッサは今一度防御の姿勢を緩くし、アイリスによる斬撃を受け

る。走る激痛に眉をひそめながらも、彼はある事に気付いた。

（コイツ、まさか……はっ、高い授業料払っただけあるぜ！）

とたん、ルークの攻撃はカロッサに防がれる。どんなに速く切り上げても、突いても、全てがカロッサのバスターソードで防がれてしまう。

おかしい、ヤツは完全に俺の攻撃を見切れてはいない…なのになぜ？　と、ルークは疑問に思う。だが、カロッサも完全にはルークの攻撃を見切れてはいないのは、事実。

そして、ルークの攻撃をカロッサが完璧に防いでいるのもまた事実だ。

ならばなぜ、カロッサは見えていないルークの攻撃を防げるのか？

カロッサは気が付いたのだ。ルークの攻撃の決定的な欠陥に。

それを見抜けたのは、カロッサの長きにわたる戦闘経験から来るものだったに違いない。

近中遠の戦闘全てに言えることだが、いかに相手の癖を見抜き、弱点を付くのかによって戦況が大きく変わってしまう。力が拮抗している相手とならばならなおさらだ。

そして、決定的な欠陥を抱えたルークの攻撃。それは、攻撃がパターン化されていることだった。確かにルークが放つ剣戟は目では捉えられない程速い。だが、その速さはルークが剣を振りやすいタイミング、構え、重心、他もろもろの条件が重なった時のみだけ成せるスピードであった。人は体の構造上、物を振るう時、最大に近い力を出せる場所は限られている。ルークは感覚的にスピードを追求し剣を振るっているため、自然とその“振りやすい位置”から剣を振るうこととなる。

そう。

ルークの剣戟は速すぎるがゆえに、単調となってしまうのだ。　あとは、ルークのパターン化されている攻撃に、タイミングをあわせ、

バスターソードを構えるだけで、ルークの攻撃を防ぐことが可能になっているのである。

「うおぉぉぉぉ！」

ルークがアイリスを振り上げ、カロッサへと襲いかかる。カロッサは即座にバスターソードを構え、それを受け止めた。
小剣と大剣。二本の剣が十字を描き、ぶつかり合うエネルギーの飛沫が咲き乱れるその中で、ルークは声を荒らげた。

「なぜだ！？なぜこうも通用しねぇんだ！？俺の剣戟は見えてないはずだ！」

「わかってねぇようだな、ガキ！」

カロッサの声が聞こえた。さっきまでの焦りとは違う感じの声だ。
ルークが問いただす前に、カロッサが言った。

「オメェは、とんだバカ野郎だな！」

「……なに！？」

「その意味わかんねぇくらい速い剣戟……テメェはただ動物みてぇに本能で動いているだけなんだよ！」

「なんだと！？」

侮辱されたことを悟り、ルークは頭に血が上り始める。
ただルークは思う、侮辱したヤツは許さねぇ、と。
空いている左手から、魔力弾を数発撃ちながらカロッサの正面に突

っ込んでいく。

「ハハ、ホント能がねぇな！」

初弾を横転でかわし、他の魔力弾はバスターソードで防いでいくカロッサ。

ダンッ！！と空気ごと吹き飛ばすかのような音をたて、ルークは地面を強く蹴りカロッサの頭上へと飛ぶ。そして、ルークは自由落下のスピードで力が相乗したアイリスがカロッサへと降りおろされる。しかし、それは当然のようにカロッサは頭上でバスターソードを横にし、それを受け止める。ルークは、そこからバク転をし地面にしゃがみこむような状態で着地する。

「はっ！」

着地してから息のつく間もなく、低い姿勢からカロッサを斬る。カロッサは、低い姿勢から繰り出されたルークの剣戟を掠めるような位置でかわし、宙返りをきり、身を捻りながらルークの背後に着地した。

「チッ！」

その場でスピンするように振り返ったルークが、背後にいるカロッサにアイリスを横凪ぎに振るう。

ルークが着ている漆黒のマントが、螺旋を描いて本体の動きに続く。やはり、来るのがわかっていたかのようにカロッサはバスターソードを振り上げるようにし、アイリスへとぶつける。

「グッ！」

手に物凄い衝撃が走る。まるで、金属バットで打たれたような痛みだ。
その衝撃で、手の力が抜けアイリスが回転をしながら宙を舞う。そのまま、自由落下をし地面に先端から刺さる。

「おらよ！」

カロッサがそう言うと同時に、血の色のように紅いバスターソードの腹で、思いっきり振りルークの腹部へと直撃する。

「ッ！！」

その力を受け止めきれるはずもなく、流れるままにルークは吹っ飛んでいく。

「グハッ！」

背中から、研究所の外壁にあたり肺の空気が一瞬で体のそとにでる。当たった壁にはくぼみとヒビが入っており、その威力が見てとれる。

――くそっ、くそっ、くそっ！

痛みをこらえて目の前にいる赤髪の男を睨み付ける。敵は追撃を仕掛けてくるだろう。しかし、体が思うように動けないのだ。

――むざむざと殺されてたまるか！

だが、手の中にはアイリスがなく、体も動かない。戦うすべなど残されてはいなかった。
しかし、いくら待っても追撃はこない。それに疑問をもつルーク。

その答えは、カロッサの言うことにあった。

「ったく、せっかく殺せると思ったんだが……意味不明なクライアントだぜ」

その声はいかにもつまらなさそうな感じだった。

そして突然、ルークから背を向けその場を離れようとするカロッサ。

「逃げんのか！？」

ルークは苦し紛れに声をだす。その場を離れていくカロッサ。

「ちげぇよ！気が変わった、今回は見逃してやる。次会うときは、首を洗って待ってるこったな！！」

カロッサは転移魔法を使い、その場から去っていく。

そして、そこには戦いの傷跡が残っている地面と、倒れている男だけだった。

「……失態だ……まさか、このタイミングでアイツが出てくるなんてっ！…」

アークは強く唇をかんだ。意識を失ったのかルークは、アークの意識の底へと消えていき、アークにバトンを渡した。アークのなかでは、苦しすぎる悔恨の念といった様々なものが複雑に絡み合っていた。

そして、さっきまで離れていてくれた二人が近づいて来る足音が聞こえてきた。

「……チッ…意識が…」

視界が徐々に暗くなり始める。そして、周りの音も聞こえなくなり

……バタリと地面に倒れてしまった。

第十一話　不安と鎖（前書き）

最近、テストや英検があって、全く更新が出来ませんでした。
深くお詫びを申し上げます。

第十一話　不安と鎖

「アーク君の容態は？」

現在は、研究所の捜査を打ち切り、三人は機動六課へと帰還している。原因は謎の襲撃者と交戦したアークが気絶してしまったからである。

そして部隊長室に、隊長陣が集まっている。

心配そうな表情をしながら、なのははシャマルに問いかける。

「それが……何の別状もないの。本当に気絶する程の怪我を負ったのかって疑問に思うくらいよ」

そう、彼の体は重症になりかねない攻撃を食らったのにも関わらず、骨折すらしていない状態であった。

「え？それって……」

フェイトは驚きのあまり言葉が詰まった。

「アーク君の体は、物凄く頑丈ってことでいいんか？」

フェイトの言葉に続ける様にしてはやてが言う。

「その解釈であってるわ、はやてちゃん。でも、他にもあるの」

「「他？」」

シャマル以外は揃って同じことを口にする。
そしてシャマルは頷くと、目の前に映し出されているモニターを見ながら自らだした結論を口にした。

「治癒能力、運動能力、リンカーコアの状態、そしてアーク君のデバイスの中にあった謎の男との戦闘データからの彼の反応速度などなど……そのデータから彼は」

シャマルは言葉を止めた。いや、後に続かないのだ。“それ”を言ってしまっていいのか迷ったからだ。言ってしまえば何か、みんなが彼に壁ができてしまうかもしれないから。そのことを本人の了承もなく言っていいのか？そんな疑問がシャマルの頭の中を支配していた。
だが、そんな中……その沈黙を破るかのように、ここにはいないはずの人の声が聞こえた。

「普通の人ではありえない数値が出た、って言いたいんだろう？」

その声は少し悲しげな、そしてどこかだるそうなものだった。声の主は、部隊長室の扉に寄りかかっていた。

「アーク！！」

その声の主は、先程まで医務室で寝ていたはずのアークだった。ところどころに包帯が巻かれていて、下半身はいつもの黒い制服のズボンを履いていたが、上半身はその制服を羽織っただけであった。

「まったく、俺抜きで話し合いか？仲間はずれも程々にしてくれよ」

ふぁ～、と話に挙げられていた本人は呑気に欠伸をしている。

「……心配したんだよ？突然雰囲気変わっちゃうし、倒れた時なんか……」

両目に涙を溜め、すすり泣きをし始めてしまうフェイト。そして周りからはため息が思わず出てしまっている。さっきまでの、暗いムードは消え、徐々に「コイツ泣かしたよ」的なムードにいつの間にかに変わってしまっていた。

「……」

フェイトを除くみんなの目線がアークへと集まる。

「あ、あれ、俺が悪いのか？」

一人状況を呑み込めていない者がいた。

「まぁ～、それはねぇ～」

「だよね」

「そうだな」

はやて、なのは、シグナムの順番である。無論他の人も何か言いたげではあったが。

数分後……

フェイトが泣き止み、あたりの雰囲気はだいぶましになっていた。
「で、はやて。あれから研究所の捜査は？」
座っているはやてを囲むように隊長陣及びアークが立っている。
「やってへんよ。アーク君が戦った男の人がまだ近くにいる可能性もあるからなぁ」
難しい顔をしながら、はやてはアークの問い掛けに答える。
「ま、的確な判断だな」
「そう言えばアーク。あの人のことを知ってるようだったけど？」
恐らくフェイトは覚えているのだろう。アークが男と戦闘する前に言った言葉を。気をつかってくれたのか、フェイトはそのことを口にはしなかった。
「ああ、そういえば言ってなかったな」
データベースを開き他の人にも見える様にモニターに映し出す。
それに写し出されたのは、粗野に見える顔だち。波の打った赤い長髪をした男だった。
「アイツの名前はカロッサ・コーネルド。幾多の殺人、器物破損などの罪を持つ、所謂傭兵。S級の犯罪者だな」
「そんな犯罪者がなぜ捕まらないのだ？」

疑問に思うシグナム。長年指名手配されていた犯罪者がなぜ捕まらないのか？と思うのも無理はないだろう。

「理由は簡単さ。ヤツは明らかに他の人とは一線を超えて強いんだよ」

その手は力の限り握られていて、どこかその表情は悔しそうだった。今回の戦闘を通して理解してしまった。いくら力を手にしてもヤツには敵わない。倒さなければならない敵を倒すことができない、それを悟ったのだ。

「アーク……」

小さな声でフェイトは呟く。毎回カロッサの事を話すごとに、その表情をする。彼の気持ちが痛い程にわかる、だからこそ心配だった。

「そんな人物が、あの研究所に居たということは……」

はやてが気付く。そう、自分達が今後危険視しなければならないこととは……

「そうだ、ヤツが……カロッサがスカリエッティに加担している可能性があるってことだ」

ただでさえ、スカリエッティの目的がわからない状態でのカロッサが加担しているということ。それは、あの危険な男と何度か交えることになる。そうすれば、アークだけではなく、機動六課のメンバーにも危害が及んでしまう。

「ま、カロッサが出てきたら俺が相手をするさ」

カロッサによる被害はできるだけ自分だけにしたい。それがアークの考えであった。カロッサはアークの問題、だからこそ自分がやらねばならない。それが今まで生きてきた理由だからだ。

「そんな危険な男と単独で戦闘なんて、うちが許すと思っているんか？」

「許す？それは違うな。じゃ、はやて。『ライセンス』の説明をしてみろ」

ライセンス、という言葉を頭の中の記憶から引っ張り出す。

「えーと、『ライセンス』を持つ者はいかなる階級、任務中であろうとも、その任務の妨げにならなければ自由に行動できる、だった思うんや」

「まぁ、大体はあってるな。つまりそう言うことだ」

この権利があれば、誰も口出し出来なくなる。アーク一人が、カロッサをどうにか出来れば他のメンバーには危害は絶対及ばない。そのためには、無理矢理にでも納得してもらうしかない。

「今のフォワード陣じゃまったく歯が立たない。かと言って隊長陣にはリミッターがかかっている。リミッターがかかっているヤツが勝てるほどカロッサは弱くはない。そこらへんは、半場強制気味だが理解して欲しい」

アークの話を聞いていた隊長陣は皆揃って苦虫を噛んだような顔をしていた。アークの言った言葉は気を使われていた方だが、遠回し

に「力が足らないものが手出しをするな」と言っているようなものだった。

「百歩譲って、それは認める」

「はやて！」

はやての思いもよらぬ言葉にフェイトは驚愕する。それと同時にはやてを睨み付けた。

「あくまで認めるだけや、フェイトちゃん。でも、条件があるんよ」

「条件？」

普通ならその条件を受ける必要はない。なぜなら彼の方が階級が上である上に絶対的な自由権があるのだから。

「危ないと思ったら、こちらから勝手に介入させてもらうで。あくまでライセンスの権利は“自由権”だけなんやろ？なら、うちらが仲間を助けるためなら行動しても問題ないやろ」

まさか、アーク自身気付かれるとは思っていなかった。はやてが提示した条件は一見、アークが言ったことを無視しているようにも見える。だが、あくまで『ライセンス』である彼が持ち得る権利は個人の自由権である。そのため、彼は命令する権限は持たない。よって、はやてが提示した条件はアークの意思を尊重しつつ、アークに手出しをすることが出来るのだった。

さすがに部隊長だけはあるな、とアークは感嘆するあまりである。

「……わかったよ、それならいいだろう」

恐らく、はやてがこのような事を言わずとも彼女達機動六課のメンバーはアークの言った事を守らず助けに来るだろう。だが、ここの部隊長が提示した条件の本当の意味はそこにはない。彼女が本当に言いたいのは、アークが無茶をしないようにするための一種の拘束具になる、というものだ。付き合いが短いとは言え、同じ機動六課の仲間だ。部隊長という難しい立場である、はやてなりの心配の仕方だった。

「それと、機動六課の部隊長として聞きたいことがあるんや。もちろん答えられる範疇で答えてくれへんか？」

「聞きたいことか？何だ？」

そのはやての雰囲気はさっきまでとは、まったく違っていた。それまるで、なにかを決心したような感じだった。

「何かうちらに隠してることあらへんか？」

鋭い。その一言に尽きる。何についてかは想像はできている。その想像は外れて欲しいと願いながらも、彼はあえて聞く。

「何をだ？」

「アーク君のさっきの言葉に、シャマルが言った体のことについて……何かしらを抱えているのはわかってるんや。それを教えてくれへんか？」

そんな真剣なはやてとは違い、どこか抜けた表情をしたあとに彼は答えた。

「ちょっと他の人より体が強いってだけだろ？何の問題があるんだ？」

「確かにそうかも知れないけど……」

そんなアークを見かねてか、はやては引き下がる。彼女はこれ以上聞いてもはぐらかされるだけだと判断したからなのだろうか。真意は分からないがどちらにしろアークにとってはありがたかった。自分の正体を知られてしまえば、ここには居られなくなるだろう。

「ま、とりあえず俺はもう寝るぜ。一応怪我人なんでね」

これ以上ここにいても疲れるだけだと判断し、部隊長室の扉へと歩いていく。

「アーク、あたしが付いていった方が……」

怪我人である彼に何かあったら困ると思い、フェイトは声を掛けるものの、彼は左手をヒラヒラと振るだけで自室へと帰っていった。

第十二話　近づく距離（前書き）

久々に投稿したくせに短くてすみませんm（__）m
こんな駄文を読んでくれるなら幸いです。

第十二話　近づく距離

部隊長室での一件を終えた俺は、その後重い足を動かし自室へと戻った。

「ふぅ～」

気の抜けた声を出しながら、一人では大きすぎるくらいのベットへと倒れるようにして、仰向けで寝転がる。何も考えず、天井を眺めていると頭の中に今日起きたことが徐々に思い出されていく。先程まで寝ていたためだろうか、俺が起きたことにより脳が本来の仕事をし始めたのだ。

そして目を瞑り、記憶を整理していく。

今日だけで色々なことが起きた。

第二人格であるルークが久々に現れた。

そして、家族の仇……カロッサ・コーネルドとの邂逅。理解した、ヤツとの実力の差に……

その差を目の当たりにし、何のために力を求めてきたのか。何年も力を求めるために費やし、色々な人に蔑まされてきたのか。そんな疑問が頭の中をただ行き場もなく回っていた。ただグルグルと意味もなく。

コンコン……

思考の渦に捕らわれている俺をよそに、何かを叩く音が部屋にこだまする。何かというのは、その音がただの音としか認識できなかったからだ。それだけ俺は思考の渦に捕らわれていた、ということだ

ろう。

コン…コン……

恐らく二回目。聞いた感じでは扉から聞こえた。しかも遠慮気味に。つまりは誰かがこの部屋に訪ねてきたということ。

「……誰だろ……こんな時間に……」

ぼそりと、思ったことを口にしてしまう。まあ、こんな時間に訪ねてくる人なんてたかが知れている。

そんなことを思いながらも、俺はスライド式の扉を横へ引く。扉を開くと、予想通りと言うべきか……そこには金髪赤眼の女性、フェイトがいた。

「……」

遅かれ早かれ来るとは思っていたが、意外に早かった。

「……」

沈黙。これ以上に今気まずいというものは無いだろう。呼吸の暇もなく質問が来ると思ったが拍子抜けだ。

「……用がないなら帰ってくれ……」

軽く突き放すような言葉を言う。というか逆に何しに来たのかを尋ねたいくらいだ。

俺は、スライド式の扉をゆっくり横へ閉めようとする。しかし……

「……って……」

声が聞こえた。彼女だってこんなことをするために来たのではない。そして、俺は扉を閉めようとする手を止める。

「……待って！……聞かせて欲しい……」

「……何を、だ？」

無論、聞かれることはわかっている。しかし、一応確認をしておこうか……フェイトの意志で聞きにきたのなら。

「アークが……その身に抱えているモノを！」

フェイトの目には決意とでも言えるものが感じられた。なんというか『私なら解決できる』そんな自信でも持っているのだろうか。そして同時に何かを俺から感じたのだろう。

はやてといい、フェイトといい、機動六課の人は鋭いな。つか、つくづく思うがお人好しだな……

「わかったよ……」

「なら！」

「でも、もう少し時間が欲しい……近い内にでも話すから……」

そうだ、俺の事は気軽に話したくはない。そのためにも見分けたいのだ。機動六課の人達が話しても大丈夫なのか……それに値する人達なのかを。

その後、フェイトにはそれで納得してもらった。
俺自身いつまでも隠し通すことができるなどとは思っていない。でもその反面、他人には話したくない。だが、さっきのような事があってはいつまでも隠せない。だからこそ、いつか俺の口から言わなければならない。そう、俺の意思で……

第十三話　さらなる重荷（前書き）

前回から近い日にちに投稿できて良かったです。
今回も駄文を読んでいただければ幸いです。

第十三話　さらなる重荷

「はぁ～、だり～」

黒い制服に身を包んでいる青年は、今日も盛大な欠伸をしながら幅広い通路を歩いている。無論こんな欠伸をしている局員などアーク以外にはいないであろう。

「ったく……何でこんな時に行かなきゃいけないんだよ」

といいながら彼は寝癖が目立つ頭を掻いている。
今彼がいるのは時空管理局の本局である。何故彼が唐突に、しかも面倒くさそうに来るはめになったかは、少し時を遡り前日の夜だったりする。

「いつ、話そうか……」

現在、自室のベッドの上で脳内会議中。フェイトに近いうちに話すとは言ったものの、結局話すことを躊躇う。
話さなければ約束を破ることになる。彼女との約束を破るとどうなるかは機動六課に来た当日を思い出せば、ある程度は想像できる。
じゃあ、話すのは？いや、話せばそれはそれで違うことで収集がつかなくなる。ひょっとしたら、話さない方が身のためなのかもしれない。
だけど、機動六課の人達なら……と淡い期待を抱いてしまう。

しかし……だが……。

「……どうすっか……」

また、思考の渦にとらわれ始めた。最近は考えてばかりだ……悩み事が多い年頃ではないはずなのだが。

《いっそのことアイツらにバラしちまえばいいんじゃねぇか？》

ん？何か聞こえた気が……これは所謂幻聴か…？

だとしたら俺は結構な感じに末期なのかもしれない。シャマルに見てもらわないと……

《って……無視すんじゃねぇ！！》

……どうやら俺は末期ではないようだな。かなり安心したよ、いやはや危なかった。

と、それはそうと……

「……その声は……ルーク、か？」

さっきの声は明らか耳から聞こえたものではなかった。具体的に言うならば念話みたいに頭に直接響くような感じだな。念話みたいなものだから言葉を口に出す必要はないんだが……久々だから仕方ないか……

《ったく、いい加減気づけっての……で、さっきのはどうよ？》

まったく、言葉使いが悪すぎだろ。少しは俺を見習って欲しいものだ。

……大して変わらないだろなどというツッコミはすんなよ。

「ん？さっきのって何だよ？」

颯爽登場！！的な感じで現れると反応に困るんだよ。

《質問を質問で返すな！！質問したのは俺だ！》

「はいはい、ついでに言うならばルークは質問ではなく提案したんだろ？」

相変わらずコイツとの会話は面白い、戦闘以外はな。

《は？……あ、俺がしたのは提案か……じゃ、アークは提案を質問で返したのか…？それはありなのか？》

そして、いまいちオツムが足らない感じがしてたまらない。そう思うのは果たして俺だけか？

「……少しは落ち着け！お前が頭使うと俺も痛くなるからやめろ！！」

退屈はしないが、体を共有しているというのは結構大変だ。ここ最近までは大丈夫だったのだが。

「で、だ……ルークは俺に、バラ……」

言葉が止まった。いや、止めたの方が正しいか？

そんなどうでもいいことは、とりあえず置いといてだ……

《……どうしたんだよ？》

ルークの言葉を綺麗にスルーし、言葉を止めた原因に目を向ける。その視線の先には、宙に浮かぶモニター。といっても当然ながらこのミッドチルダではモニターが宙に浮いてるのは普通なので言葉を止める原因にはならない。原因は、そのモニターに映し出されたメッセージだ。ベッドで寝ていた体を起こし、浮かぶモニターの前で立つ。

《何て書いてあるんだ？》

自分で読めよ。言ったところでルークは読まないだろうが……

「なんだって今時間に……」

俺宛に来たメッセージに目を通す。文書はそんな長くない。というより殆どない、たった一行……いや一文のみである。

ライセンサー、アーク・ハルバートへ

来い。

こんなメッセージを飛ばしてくるヤツなんて一人しかいない。

「チッ……」

送られてきたメッセージはよく見知った、そして嫌な人物からだった。

《“アイツ”まだ死んでなかったんだな》

ルークの声色は嫌悪が混ざったものだった。

「まったくだ……」

以上、回想終了。

《別に行く必要なんてねぇんじゃ？》

確かに、俺だって行きたくはない。わざわざ嫌いなヤツに会いに行く人なんているか？少なくとも俺はいないと思う。

（俺だって行きたくはないさ。だがよりによって“アイツ”だ……一応行ったほうがいいだろ）

さすがに、本局のど真ん中で変質者扱いはされたくない。ルークとは念話で会話させてもらっている。

しかし、そんなことをしなくとも既に俺は周りから浮いている。

なぜだって？

そんなのは簡単さ。普通の局員とは違う黒色の制服を着ているからだ。といっても、もう一つ理由はある。今は関係ないことなので別に話さなくてもいいだろう。

《周り見てみろよ。皆コッチ見てるぜ？》

わかってるっつの！いちいちうっさいやつだ。
でも、ルークが言いたくなるのもわからなくもない。局員とすれ違う度にヒソヒソ声が絶えない。
こっちとしてみれば気分が悪い。ライセンサーだからというわけではない、つまり原因は俺にある。
ま、そこは置いといてだ。何とか目的地に着くことができた。

《いよいよ、だな》

いつも、ただ五月蝿いだけのルークも普段とは違う様子だ。そんだけ嫌なヤツという事なんだが……
目的地というか、俺は現在扉の前に立っている。その扉の横には“ライセンサー統轄部”という文字が記されている。
……なんというか、捻りがない……
気を取り直して、

「じゃ、入りますか……」

扉を手で触れ開ける。
特に何も無いことを祈りながら……

「やっと来たか、遅いから来ないのかと思ったよ」

扉を開いた途端この言われよう。というか相手は俺に対して背を向けている。頭の後ろに目でもついているのだろうか？

「……これでも早く来た方だよ」

舌打ちするのを、辛うじて理性で抑える。いっそのこと目の前の男を殴ってやりたいくらいだ。

「そうか、ならそういうことにしておこうか」

コチラに向きながら、わざとらしく目の前の男は言う。ホント、コイツの言い方はいちいち気にさわる。

めんどくさいので一応説明しておこう。今俺が会いに来たヤツはマリック・ジェイヤード。背丈は俺より少し低いくらい。そして、黒ぶちのメガネに紺色の髪。パッと見、インテリ系に見える。だが、重要なのはそこじゃない。ヤツはこのライセンサー統轄部の主とも言える。つまり、マリックは俺を含むライセンスを所持している人達に特務を言い渡している人物である。同時に立場上一応、マリックは俺の上司にあたる。

「そんで、何で俺を呼んだんだ？確か俺は、休暇中なんじゃないのか？」

確か明日から、機動六課のメンバーがあるホテルに警護をしにいくらしい。早いうちに機動六課へと帰りたい。こんなヤツと顔を合わせるなんて、一刻も早く終わって欲しいものだ。

「ふん、そんなのは知ってるさ、誰が休暇を言い渡したと思っているんだ、このグズ」

「……いいから話を進めろ」

コイツの顔を見るだけでも十分過ぎるくらいに嫌なのだが、追い討

ちをかけるようにウザいマリックの話し方。もし、俺の上司じゃないなら殴っている。

「ま、いいだろう。これといって重要な用事はない」

無いのかよ、じゃ呼ぶなよ、などと言った矢先、マリックはさらに口を止めずに話を続ける。

「だが、上からの命令でね。あまり目立った行動をするな、だと」

……上から？ああ、そういうことか……

「つってもお前は聞かないだろうから、俺からもう一言言っておいてやるよ」

マリックは口元をつり上げ、さらに続ける。
この表情には見覚えがあった。確かに大概……

「もし聞かなかった場合、お前の大切な仲間が消されるぜ？」

“消される”……その言葉が出てしまえば迂闊に俺は何もできない。それが深く、抉るように心に突き刺さる。今となって、その言葉が出てくるとは思いもよらない。
そして、普通ならそんなことをすれば消した側にも危害が加わるだろう。そう、普通の立場なら、だ。マリックは、その立場なのだ。質が悪いとでも言っておこうか。簡単に言うならば彼は、人の不幸を糧にして生きてる、といったところだ。
だから、俺は嫌いなのだ。いや、誰にだって嫌われるだろう。コイツみたいなヤツなら。
今だってマリックは、俺の表情を見て内心、喜びに満ちているだろ

う。

「要件は済んだ。さっさと帰れ」

シッシッと手を払うようにして、俺に出てけと促す。所詮ヤツは俺を含むライセンサーのことなど駒程度としか認識していないだろう。マリックの命令に従うのは気に食わない。かと言ってヤツと同じ部屋にいるのは御免だ。ここはひとまずヤツの命令に従ってやるか。俺は体を反対に向き、部屋を出る。そんな中、俺は思う。ヤツに殺意が芽生えたのは久しぶりだ。初めて会った時からマリックはあんな感じだった。その時だろうか、最初に芽生えたのは……

そして、俺は一人管理局本局から帰るべき場所に向けて足を進める……

第十三話　さらなる重荷（後書き）

こうして欲しい、というものがあれば教えてください。
非才ながら頑張ってみます。

第十四話　ホテル　アグスタ？（前書き）

最近、ＰＳＰでなのはが発売されましたね。
皆さんは買いましたか？
自分は買いましたよ。
結構面白かったです。買ってないひとは是非買ってみては？

遅くなりましたが、読んでくれれば嬉しいです。
感想待ってます（＾－＾）／

第十四話　ホテル　アグスタ？

全身黒ずくめのプラズマ野郎――もといアークが立ち去ったあと、さほど時間が立たずしてライセンサー統括部に来客が訪れた。

「「失礼します」」

凛とした声と共にドアが開く。入ってきたのは男女一人ずつの黒い制服を着ている人だった。その黒い制服は『ライセンサー』の証でもある。

男性の方は二十代前半くらいだろうか。ブラウン色の癖っ毛の髪で、肌の色が少し白く背が高かった。

そして、女性は肩にかかる程度の長さの髪の色は薄い紫で、ツインテールにしている。スレンダーな体型で、恐らく彼女を見たら人は十中八九美人というだろう。その姿ながら歳はとなりにいる男よりも5つくらい下だろう。だが、いかにもできる女という感じだ。

二人は、その部屋の奥にある、無機質な机の前に立つ。

「ごくろう、任務が終わったばかりなのにすまないな」

二人の前にいるのは、統括部の主――マリックだ。

彼は、椅子に足を組ながら座っていた。いかにも、謝罪の様子は微塵もないように見える。

「何をいまさら、思ってもないことを……」

ブラウン色の髪の男はわかっていたかのように言った。その表情はもはやあきれているものだった。

「まぁ、そんな顔するな。そんなことのために呼んだわけではないんだよ」

「それでは、何か新しい任務でも？」

少女の方は、マリックが二人を呼び出した理由について知りたいようだ。なんせ急に呼び出されたのだから。

「ものわかりがよくて助かるよ」

そう言うと、彼は手を横に振る。すると立っている二人とマリックの間にモニターがあらわれた。

「これは……？」

ブラウン色の髪の男は、そのモニターに映し出されているものに疑問を抱いた。

それに映し出されていたのは一人の男だった。ボサリ気味の黒い髪に、紺色の瞳。そして、彼の着ているものは二人とも見覚えのある黒い制服だった。というのも、二人が着ている制服とデザインが変わらないものだ。つまり、そのモニターに映し出されている人も『ライセンサー』ということを意味する。

「お前たちはしばらく、コイツの監視および、動向を探ってくれればいい。方法は問わない。それに何もなければ連絡はしてこなくていい。で、この任務に抜擢した理由は聞くまでもないだろう？」

マリックはそう言うと、口元を歪めさせながら笑う。

「それはわかりかねますが……何故このタイミングで私達がやらなければならないのですか？」

彼女の口調は丁寧ではあるが、その話し方はいかにも不満があるといった感じだ。

「ふん、深くは知らん。どうやら“彼ら”の目に障るらしいとしか言えないね」

「そう……ですか」

渋々と引き下がった。これ以上聞いても時間無駄だと思ったのだろう。

「それでは――」

マリックはモニターを消すと、二人を順番に見据えた。

「リューロ・アルバーン一等空佐」

「はっ」

ブラウン色の髪の男――リューロは、簡単に返事をした。

「それと、スルウド・ステルティン二等空佐」

はい、と紫色の髪の少女――スルウドもマリックの声に応じた。

「二人には、任務についてもらう。詳細に関しては後にデータを送ろう」

二人は敬礼をし、部屋を出た。人が減ったことにより、再び静寂が訪れた。
この部屋に残っているのはマリックただ一人だ。
「さてと、楽しみだね。君がどのように動くのかが――そうだろ、アーク？」
表情が酷く歪み、笑う。その言葉は、静かな部屋のなかで反響を繰り返していた。

「ほんなら任務のおさらいや」
清々しいくらいの青空を突っ切るヘリコプターの中ではやてはモニターを使い説明している。
「今まで不明だったガジェットドローンの収集者は現状ではこの男……違法研究で広域指名手配されている次元犯罪者ジェイル・スカリエッティの線で捜査を進めている」
「こっちの捜査は私が進めるけどみんなも一応覚えておいてね」
はい、とフォワード陣が元気よく返事をする。
そして、そのモニターに映っているスカリエッティの隣に、赤髪の男も同時に映し出された。

「フェイトさん、そっちの男の人は誰ですか？」

ふと疑問に思ったのだろう。エリオは赤い髪の男を指さしながら、そう口にした。

「カロッサ・コーネルド、っていう犯罪者。どうにもスカリエッティと関わりがあるみたい。フォワード達はこの人との交戦は避けた方がいい。で、その人はアークが追っている人なんだけど……アーク大丈夫？」

フォワード陣や隊長達から離れているところにヤツはいた。

というか、イスに横倒れになっていた。屍と化してる理由など、今さら問う必要もなかろう。

「……これが大丈夫なヤツに見えたのなら……すぐにシャマル先生に診断して貰うんだな……」

正直ここにいる誰もが、今すぐ診断してもらった方がいいのはアークに違いないと思っているだろう。

弱々しい声を出しつつも手をヒラヒラと上げ、続けてくれ、とフェイトに促した。一応話を聞いてくれてはいるらしい。

「ハハハ……お大事に」

乾いた声でフェイトは手を振って屍に応じた。

「で、今日これから向かうのがここ。ホテルアグスタ」

リインがモニターの前に立つのと同時に画面が切り替わる。変態チ

ックな博士の変わりに大きな建物が現れた。その建物がホテルアグスタと呼ばれるものだ。

「骨董美術オークションの会場警備と人員警護。それが、今日のお仕事ね」

なのはが説明を続ける中、モニターは次々と大ホールやらロビーなどが写されては消えてを繰り返している。

「取引許可の下りているロストロギアがいくつも出品されるので、誤認してガジェットが出てくるかもしれないので私達が警護に呼ばれたです」

「この手の大型オークションだと密輸取引の隠れ蓑になってたりするし……いろいろ油断は禁物だよ」

リイン、フェイトの順番で仕事の内容を補足していく。確かにフェイトが言った、密輸取引が行われる可能性がある。鍛えている新人達にとって、多少なりとも不確定要素が残るのは隊長達にしてみても不安なのだろう。

「現場には昨夜からシグナム副隊長やヴィータ副隊長など数名の隊員がはってくれている」

「私たちは建物の中の警護に回るから前線は副隊長の指示にしたがってね」

『はい！』

地獄(ヘリコプター)から無事解放された俺は大地の有り難みに喜んでいたところ、隊長達からお呼びがかかった。

「はい、これ」

満面の笑みでフェイトから渡されたのはケースだった。その謎の笑顔に戸惑いつつも、ケースを受け取った。これ自体の重さはたいしてない、軽かった。

「何が入ってんだ、これ？……なにかの機械か？それにしちゃ軽い気がするが……」

ヘリコプターの中で任務のことを聞いていた（実際は半分も聞いてない）が特に使うものはなかったはずだが。何か引っ掛かる、フェイトに笑顔でケースを渡された辺りから……。

「これ、アーク君のお仕事着だよ。もしかして、聞いてなかった？」

なのはの鋭すぎる質問に、ビクッと身体が跳ね上がる。その高さ、約1センチ。筋肉と魔法を使わないで、浮いたのは自分でも感心していた。

――落ち着け。落ち着くんだ、俺！！俺はライセンサーだ。こんなことくらいでは、負けはしない！

それは理解不能なくらい、意味のない意地だろう。

「大丈夫大丈夫。ちゃんと聞いてたヨ？」
無駄な意地を張った結果がこれだ。語尾が半オクターブくらい上がった。やっちまった。自分で聞いてないことをカミングアウトするようなものである。
「にゃはは。ちゃんと聞いてよ、アーク君」
なのはの声と顔は笑っているが、目が笑っていない。いや、人間って怖いよな。
「弁解の余地が欲しいところだが、今更か……。で、着替えたらどこにいればいい？」

「やっぱフツーの警備はしっかりしているんだな」
俺は黒いタキシードを着て、となりのフェイトと肩を並べホテルの廊下を歩いていた。
「うん、でも気を抜いちゃだめだよ？フォワードだって待機してるんだから」
「わかってるよ、さっきのはただの感想」

ホテルは大きさのわりに、思ったより複雑な構造はしていなかった。ホテルに入る前、着替え終わったのは良かったのだが、いかんせんなのはとフェイト、はやての三人が遅かった。女性の支度は時間がかかると知人から聞いたことがあった。
それに来たのは良かったのだが、三人のドレス姿の感想を「似合ってるよ」と気をきかせて言ったつもりだったのだが、あまりおきに召さなかったようだ。そこを変に期待されても困るだけなのに。

「一つ気になったんだけど……」

「ん？何かあった？」

何か異常でもあったのだろうか？と思ったが、どうやら違うようだ。彼女の様子から、そうでないとわかる。

「ううん、そうじゃなくて。昨日のことなんだけど……本局に行った、って聞いたんだけど。どうしたの？」

「あぁ、ちょっとライセンサーのお偉いさんに頼まれ事をされにいってただけだよ」

肩をすくめ、フェイトの問いに応じる。

「呼ばれるなんて、たいしたことじゃないし。それに、特に動いてないよ」

一応、つい最近まで俺はシャマルに見てもらう程の怪我人だったのだ。悪化するわけがないが、フェイト達からすればそうとうの怪我だったのだろう。よくよく考えてみれば心配されてもおかしくはないわけか。

「べ、別に疑ってはないけど……フォワードの練習に来ないで、何も言わずに行ったから」

フェイトは慌てて否定する。どうみても怪しい。というかバレバレである。そこはあえて突っ込まないでおこう。

「まぁ、俺だって悪いとは思ってるけど……今度埋め合わせするよ」

どうせ、機動六課に来た当日にあった一件の埋め合わせをしなくてはいけない。やることには変わりはない。

「じゃあ、お願いね」

「はいはい」

何も起きなければいいな、と呑気なことを思いつつフェイトと談笑していた。

だが、何も起きなければ俺たちの警護は必要ない。

『ガジェット来ます！陸戦？型、機影３０、３５！』

『陸戦？型、２、３、４！』

アルト、ルキノの順番で、立て続けに報告が入る。思った通りというやつか。できれば何もなければよかったが。

「フェイト、俺はフォワードの援護に向かう！中の人達を頼んだ！」

「わかった！こっちはまかせて！」

互いに視線をかわし、頷き合う。二人は駆け出した、俺は窓のある方向へ、フェイトはなのはのもとへと。

「……来たか」

ブラウン色の髪の男は、ホテルに集まってくるガジェットに言ったのだろう。
ホテルからさほど離れていないところに二人組の人影があった。二人とも『黒い制服』を着ている。

「はい。それに“彼”出てくるかしら、リューロさん？」

紫色の髪の少女は隣にいるリューロと呼ばれる男に問う。問うというよりは殆ど確認に近い。まるで答えがわかっているかのように。

「さぁな、だがあそこにいる以上出てこないなんてことはないだろ」

リューロはモニターを開き、少し前にマリックから届いたメッセージを確認している。
確認を終えるとすぐさまモニターを消し、再びホテルへと視線を向けた。

「楽しみにしてるぜ――――“アーク”」

彼の表情は何かを楽しみにしている、そんな顔だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9993r/

魔法少女リリカルなのは ～Dual Striker～

2011年12月25日23時50分発行